40
東京黒百合会
第40回展記念誌
2002.10

東京黒百合会　第 40 回展　記念誌

目次

表紙絵
青木　宏　「No.08」　油彩　F 30
部分

第 40 回展記念誌の発刊を祝して

加藤文男

この度東京黒百合会の第 40 回記念展を迎え、また同時に第 40 回展記念誌を発行することが出来ることを深く感謝している。

東京黒百合会の第 1 回展は 47 年前の昭和 31 年に開催され、第 4 回展の昭和 42 年以降は毎年開催されている。私は 4 回展から入会し、創立者の石田哲郎さんの後を継ぎ、24 回展頃から 38 回展まで事務局を務めてきたので、今回の記念誌の発刊は真に喜びに絶えない。

前回の 30 回展記念誌から 10 年しか経っていないが、高齢者が増加しているので記念誌の作成は早いほど良いという判断によるものであるが、これに加えて私は 30 回記念誌作成以降に開催された 10 年間、なかでも最近の数年間の東京黒百合会展は過去に見られなかったレベルの高い展覧会であったので、今が記念誌作成のチャンスと思う。

展覧会の作品レベルは出品回数の増加に比例する。東京黒百合会の 39 回展までで、全会員の三分の一が 20 年以上出品している。これが東京黒百合会展のレベルを高めている要因ではなかろうか。

ところで東京黒百合会は「黒百合会」の伝統を引き継ぎ、自由で明るく楽しい会として続いている。このため「お楽しみ村」とも言われているが反面、自分の絵の世界を追求する情熱を持った珍しい会である。

今後は若手会員の入会を進め、この良き会が永続するよう務めて欲しいと思う。

東京黒百合会の歩み

加藤文男　青木宏

東京黒百合会は今年で第40回展を迎える。本会がこのように長く続いているのはまことに喜ばしいことである。この46年間を振り返り東京黒百合会の歩みについて次ぎのように四つの期に分けて説明したいと思う。

1．発足期
　　1～10回展　昭和31～昭和48年
2．新体制移行期
　　11～18回展　昭和49～昭和55年
3．拡充期
　　19～30回展　昭和56～平成4年
4．充実期
　　31～40回展　平成5～平成14年

1．発足期

1～10回展（昭和31年～昭和48年）

東京黒百合会の発足は故石田哲郎さんの尽力によるものである。発足当初のことについては石田さんが北大黒百合会60周年記念誌に「東京黒百合会と私」という小論を書いており、本会の30回展記念誌にも引用しているのでここでは省略する。

第1回の東京黒百合会展は昭和31年に東電サービスセンターで開催され12名が出品した。この展覧会は2日間に過ぎなかったが大変な盛況であったという。

その後昭和32年、昭和33年に第2回、第3回の展覧会が開催されたが、出品目録がないので詳細はわからない。

東京黒百合会の誕生

（北海タイムス　昭和31年4月24日付7面　抜粋）

故有島武郎氏が北大の英語教師だったころ、絵の好きな学生が集まって黒百合会というグループをつくった。以来、戦争、敗戦と嵐の半世紀....。

だがこの会は幾多の若き世代に脈々と受け継がれて今年で50周年を迎えた。これを機に在京のOBたちが東京黒百合会を結成、最初の小品展を4月25、26の二日、銀座の東電サービスセンター画廊で開いた。この中には有島武郎氏の(やちだもの木立)油4号も特別出品されるなど古き良き時代の思い出に満ち、札幌への郷愁を秘めていた....。

(注：会場は当時銀座松坂屋のとなりであった。)

黒百合会が生まれたのは明治41年(1908年)、北大唯一の美術同好会として道画壇にも特異な光彩を放った。今度「東京黒百合会」が借りた会場は12坪の手狭なギャラリーだが、飾り付けの24日夜には､会長の日本ビール専務松山茂助氏（大正4年卒)をはじめ日本興農社長石田哲郎氏（昭和15年卒)、オリエンタル酵母会社課長の岡澤廣二氏(昭和13年卒)、東邦大物理教室の遠藤博氏(昭和14年卒)、電々公社研究主任中山正和氏（昭和14年卒)、会社技師長の佐々木栄一氏(昭和17年卒)。この面々が童心にかえった面持ちで....

「有島氏の(やちだもの木立)は故宮部金吾博士の家から持込まれた。大正3年有島氏が札幌を去る時、恩師でもあった宮部博士へ贈ったもので、ところどころシミもついて時の流れは覆うべくもないが、白樺派の新鮮さはいまも残って北海道情緒を独得なタッチに偲ばせている。」

このほか日本宇宙旅行協会理事長原田三夫氏、病院長服部光平氏、美術評論家外山卯三郎氏らの(黒百合会OB)もそろって出品。裸婦あり、風景あり、少女像ありで画風も印象派から写実、シュールレアリズムとなかなか多彩。25日には小田原から老躯をひっさげて来た名誉会長の小熊捍氏(前国立遺伝学研所長、北大名誉教授)（注：黒百合会の名付け親といわれる）を囲んでお茶の会。26日には銀座のビヤホールに松山会長を招いてコンパ。「都ぞ弥生の雲紫に」と気勢をあげる。最初医者になるはずだったが黒百合会が縁で本職画家になったという変わり種、篠原昭寿さん(28才)造形美術会員は「単に北大出身者ばかりでなく札幌に郷愁を持っている在京の人なら誰でも、東京黒百合会は大手を広げて迎えいれたい。家族ぐるみ友人ぐるみのなごやかな集いとなれば、それでいいのです....。」と目を輝かせている。

第４回展の開催までは９年ほどのブランクがあり、昭和42年に開催された。それ以降は毎年開催されている。（なお、昭和50年には春秋２回の展覧会が開催された）

第10回展までは北大黒百合会のOBは誰でも東京黒百合会に入会出来た。この期間は入会金や年会費を徴集せず、展覧会経費のみを出品者が負担した。このため会員への通信費などの諸経費は石田さんが個人で負担する形となった。１～10回展までの合計入会者は65名であるが、展覧会の出品者は毎回25名～30名に止まっていて、一度だけ出品してやめた人が多かった。これも発足期の悩みであり、毎年のように画廊を変えて渡り歩く有り様であった。

この期間の展覧会で特筆すべき点は、本会のただ一人の会長であった松山茂助さんが１回展から７回展まで出品し、展覧会の懇親会にも出席したことである。

松山さんは札幌農学校時代に有島武郎さんから水彩画の指導を受けたことがあり、札幌ビールの社長、会長の激務にありながら絵を盛んに描き、玄人はだしの素晴らしい腕前で、本会の誇りとする大先輩である。

２．新体制移行期

11～18回展　（昭和49年～昭和55年）

この期間の展覧会出品者数は25～30名と横ばいに推移しており、先を見た体制整備が実施された。すなわち11回展から入会金や年会費を徴集する会計制度が導入され、また発足期のワンマン体制から総務、会計、展覧会等の業務の担当責任者をきめ、お互いに責任を分担する運営体制がとられた。

次は会員の絵のレベルアップのための対策として、本会にグループ展を設けることになり、昭和49年から北窓展、昭和50年から北陽展、昭和54年から北楡展がそれぞれ発足した。

クロッキー会も昭和50年頃から再開された。（この会は発足期にも実施されていた）

春秋２回の一泊写生会は昭和54年頃からスタートした。この会は人気があり今日まで続いている。

昭和55年頃に故小川信一さん宅に集まり、有志の合評会が行われた。この会は小川さんの逝去により中止された。

「有島武郎・今田敬一　黒百合会の画家たち展」開催される

2001.6.2～7.11まで北海道滝川市の「滝川市美術自然史館」で黒百合会の画家たち展が開催された。東京黒百合会からは加藤文男、関谷栄一、中島敏男、彦田勇次、下田修、松田忠好、杉山直の７人が出展した。さっぽろくろゆり会からは31人が参加した。会場には有島武郎と弟の生馬の作品に、北大教授で黒百合会顧問、道展会長の今田敬一、画家木田金次郎、医師坪内六郎の作品などが展示され魅力溢れる素晴らしい企画展であった。有島武郎たちが始めた黒百合会とは聞いていたが、この企画展で、改めて黒百合会の伝統が紹介され認識が深められた。

今田敬一の作品は出品数も多く、私達が学生の頃に良く見たやや抽象的な木の絵など質の高い作品が展示された。東京黒百合会とさっぽろくろゆり会会員たちの作品もそれぞれ先輩の作家に勝るとも劣らない素晴らしい作品が並んだ。　（敬称略）

有島武郎

今田敬一

滝川市美術自然史館の会場にて

杉山　直

３．拡張期

19 ～ 30 回展 (昭和 56 年～平成 4 年)

この期間になって展覧会出品者数が 19 回展の28名から30回展には43名と15名も増加した。これは絵の熱心な若手入会者が多かったためで、この期間の合計入会者は 26 名に上っている。

会員数の増加により展覧会場が狭くなったため、30 回展からこれまでの「ロイヤルサロン銀座」から「銀座アートホールギャラリー」2 階に移転した。

この期間で特記すべきことは昭和 60 年度から毎月会報が発行されるようになったこと、さらに平成 2 年の総会で会則が承認されたことである。

このほか昭和60年から年4回の合評会が行われるようになり、更に昭和 61 年から月例写生会がスタートした。

グループ展としては北廸展、北香展が新たにスタートした。またこの期間には 20 回展、25 回展、30 回展の 3 回の記念展を開催し、30 回展では記念誌も発行された。

本会の創立者である石田哲郎さんは平成 2 年に亡くなったが、石田さんは数年前から自ら相談役に退き、会の運営は加藤等に任されて来た。

加藤が本会の事務局を引き受けたのは昭和 61 年頃で、その後、平成 13 年に至る約 15 年間その任にあたってきた。

４．充実期

31 ～ 40 回展（平成 5 年～平成 14 年)

この期間の展覧会出品者は42～46人(会員数は 50 人に接近）の水準を維持しているため、会員の入会は抑制ぎみに運営され、専らレベルアップのための対策に注力してきた。この点はいままで各種対策を講じてきているので、この期間は収穫期を迎えているといえよう。

ただこの期間は残念ながら高齢化による逝去者が増加し、11 名の会員が亡くなった。

しかし中堅メンバーの作品のレベルが大幅に向上したため、全体として年々作品の水準は上がってきている。

この数年は過去に例を見ない充実した展覧会が続いている。

作品のレベルアップは本展、グループ展、公募展への出品回数の増加やクロッキー会、合評会、一泊写生会への参加が大いに貢献しているものと思われる。

なおグループ展関係ではメンバーの減少により北窓展､北陽展､北楡展が解散し新たに北晨展、北翔展が平成 5 年に発足した。同じ年に新しいグループの北斗展もスタートした。

ところでこれらの展覧会は次のような開催回数になっている。

現在活躍中の北晨展、北翔展は平成 14 年までの開催回数である。

北窓展　19 回　－北晨展　10 回
北楡展　14 回　－（北晨展と北翔展へ）
北陽展　18 回　－北翔展　10 回

加藤は北陽展の第 1 回から参加し、同展が解散後は北翔展に参加しているので、平成14年までに28回も出品していることになる。

現在あるグループ展は上記北晨展、北翔展のほか、北廸展、北香展、北斗展の五つの展覧会があり、会員の作品のレベルアップに貢献して来た。

平成 9 年に 35 回記念展を開催し、記念アルバムを作成した。

平成 12 年度から月例写生会（日帰り写生会）は出席者が少ないため、当分の間、休会とした。これに代わり、久方ぶりに裸婦のデッサン会が佐々木俊明さんの尽力により、平成13 年度から再開された。裸婦を画く人が増えているので、この会により、デッサン力が高まることを期待している。

また同じく平成 13 年度から後藤一雄さんの尽力により本会のホームページが開設された。ホームページでは東京黒百合会展や五つのグループ展の出品作品の紹介を行なっているほか、会員の個展紹介や本会の名誉会員の作品紹介を行って来た。

平成 14 年度からは有料で会員のインターネット個展を引き受けることを企画している。

加藤の事務局担当はいささか長くなったが、平成 13 年度から杉山直さんにバトンタッチした。杉山さんは上記ホームページの開設など新しい感覚で、積極的な運営につとめており、とくに平成 14 年度は 40 回記念展の開催と 40 回展記念誌の出版が進められている。

最後に本会の会報の充実についてふれておく。会報で特記すべきことは、平成 2 年 4 月から平成 12 年 3 月までの 10 年間は彦田さんが会報を担当され、内容の充実を図り、今日の会報のシステムを作られた。小石さんは彦田さんの後任として平成12年4月から編集にあたっており、読み易く、またお互いに親睦を深めうる会報を目指し尽力している。

東京黒百合会のホームページを見て下さい！!
http://members.jcom.home.ne.jp/tkuroyuri/

平成 12 年の総会で会のホームページ制作が承認され、企画委員が結成された。メンバーは青木、小石、佐々木（俊）、後藤、江澤、杉山の 6 名で、制作は後藤一雄さんの技術力で完成することが出来た。ホームページ立ち上げの狙いは 2 つ。その 1 つは若手会員の獲得で、 2 つ目は会員相互の交流である。そのためにページ編成を 5 つの分野に区分した。東京黒百合会がどんな会でどんな会員がどのような活動をしているのか知ってもらう目的で、①グループ展等の展覧会ご案内と②展覧会の作品紹介が核となっている。それを更に拡大し会員相互の交流を狙いとして③インターネット個展コーナーや名誉会員シリーズとしての作品展、遺作展など個人のまとまった作品の紹介コーナーを充実させる事で各会員のレベルアップを図っている。④私のモチーフ⑤大先輩の思い出のアルバムも会員相互の考え方や技術の交流に役立てる主旨である。更に TOPICS と News により折々の会の動向を伝え、HOT LINK として北大黒百合会や個人のホームページと LINK を張る事で会の活動の充実振りをアピールしている。各会員の積極的な参加と同時にホームページへの助言を切にお願いする。　杉山　直

ホームページ運営：後藤　一雄

青木　宏

「絵を画いて 70 年」

もの心ついてから絵を画かないで過ごした記憶はない。油絵を画いて 55 年。抽象の世界に居を定めて既に久しい。自由闊達に画いた結果が「独りよがりではない絵」になるような境地に到達したいと思いながら、最近、その明かりが見えてきたように感じることが、ごく稀にある。

これは真実なのか、はたまた錯覚か。

まあ、これからの楽しみにしておこう。

安孫子　園美

「義父とのお別れ」

私は義父（安孫子孝一）の次男の嫁です。毎年義父の家に行く度に「ソノミさん、僕の絵をみてくれ」といわれ、自分の部屋に案内し、絵の構成、色を説明し、私がここが良いとほめると嬉しそうな顔が思い出されます。人間うまくいっているもので、知人が亡くなった時、良い点ばかり思い出され、イヤなことは頭に浮かんでこないことです。

皆に絵を見て、思い出してもらい、天国で義父は喜んでいることと思います。

石川　三千雄

「東京黒百合会に入会して」

4 年前、60 歳定年年令に達した時、仕事以外に生き甲斐を持とうと思い､家庭菜園と油絵を始めた｡小学校時代には絵が好きであったので、何とかなるだろうとの気持ちから近所の「お絵書き教室に週 1 回、小学生の仲間と通い始めた。1 年程してたまたま柔道部 OB 会で下田先輩から東京黒百合会を紹介され、入会、現在に至っている。自分が満足できる絵にはほど遠く、難しいものというのが今日の実感です。

江木　博

「私の場合」

私の場合、勤めを終え余生の趣味として絵を始め、一昨年東京黒百合会に入れていただいた。おかげで諸先輩の味わい深い作品に接し、また合評会でいろいろの意見を聞き、続けておりますが、特に感銘をうけましたのが、第 191 号会報に紹介された「生きた絵を描く為の十則」です。

自分自身、絵に溶け込んで納得できるためにはどうあるべきか。どう努力すべきか。少しでもこの境地に近づける様に続けて行きたいと思っております。

江澤　昌江

「絵は面白い」

白い画用紙の真ん中をちょっとはずれたあたりから描き始めよう。とても勇気が必要だ。しかも調子が出ない。不自然で窮屈だ。でもがまん､がまん。お～そうそう、無限に引けるんだけど、この線しかない！なんて気持ちが好いんだろう。それにこの滲み。きれい。もっと水をたらそう。向こうから手前への線は、どう描いたらいいんだろう？向こうからこっちとか考えてはいけないのかな？なにも知らずに、生まれて初めて見た気分で見よう！

遠藤　博（名誉会員）

「絵というもの」

絵というものは三次元のものを二次元にするのだから、本質的に「ウソ」であり、写実などということは物理的にあり得ない。絵という「ウソ」をどうしたら本当らしく見せるか、つまりごまかすのが画家の仕事だ。そのごまかしの達人がセザンヌでありゴッホである。またどうせ「ウソ」なら徹底的に「ウソ」で行こうと居直ったのがダリでありピカソである。

私たち素人も、どうしたらうまくごまかせるかと苦労するのだが、「ウソ」が「ウソ」で終わって残念である。

大武　八郎（名誉会員）

「私のモチーフ」

外国風景がモチーフの対象になったのは海外旅行が出来るようになってからです。私が外国、特に欧州、アフリカの風景に接した時、「これだ」と心中で叫んだものです。家の古さ、昔を思わせる雰囲気、中世を思わせる佇まい、私の尊敬するポールセザンヌを思わせる色彩、ただただ私を魅了するものばかりです。セザンヌは印象派から脱出したとはいえ、その意図するところは「現代絵画のプリミテイーフ」と自負していたが、実際は保守的なところに、私は惹かれていたのであります。

簡単に言えば、中世の町に惚れた、セザンヌがそこにいる....と言うような気持ちで数枚のデッサンと写真とクレパスを頼りに、数年前の風景を描いて楽しんでいるにすぎないのであります。ただ、風景によって明暗とか遠近の差とか、空の強さ等モチーフに差をつけて描くようにしています。

大谷　敏久（名誉会員）

「絵を描くこころ」

絵とは何か、何のために、何故絵を描きたくなるのか、自分の作品なのに何故他人に見せたいのか、自ら問う日々です。先達の言やよし、「うまい絵描きにはなれるが、感動を与える絵描きになるのは難しい」「絵描きは何でも描けなければ絵描きではない、だが何でも描けても絵描きではない」とも。では何を、何から、どうすれば絵を描くこころを知り、その境地に近づくことが出来るのでしょうか。日暮れてなお途遠しです。嗚呼。

笠原　寛

「正直な話」

30数年前、私の結婚披露宴に石田哲郎さんにご出席願い、祝辞をいただきました。「笠原君の絵は今はまるでダメだが、70才になるまで描き続ければいずれは自分の絵になる。」とのお話でした。それを頼りに描き続けて70才までに10年を切りました。石田さんはこの後次ぎのようにつけ加えました。「自分の絵にはなるけれども、上手くなるかどうかは別の問題だ。」私の絵の行く末が解っていたのかも知れません。

鍛冶　弘

「一期一会」

正月、散歩道でハッとするような風景に出会い、スケッチをし、写真を撮って絵にしてみたが、思ったようにならない。検証のため再度歩いてみると、澄み切った冬空の下で近くに見えた富士山は見えず、光の輝きも無くて、感動は湧かなかった。一期一会の気持ちで対象に接し、描く気にさせているのは何なのか、それをどのように限られた絵画空間に納めるか、考えてスケッチすることの大切さを改めて痛感した。

加藤　文男

「大先輩の生きざまに学ぶ」

本会の大先輩で90才まで生きられた石田博さんや安孫子孝一さんは、最後まで絵を描き続け、90才を迎えても夢を持ち続けられ、最後に絵描きとしての黄金時代を迎えられたが、私もこの大先輩の生きざまに学びたいと思う。

菊池　誠作（名誉会員）

「箱根の山」

箱根の山は天下の嶮といわれたほど、かっては旅の難所として恐れられていた所であった。深い谷、突兀（とっこつ）とした山々の姿は絵画の魅力にふさわしい。山あり川あり、さらに湖もあり、めぐまれれば富士の姿も目の当たりである。容姿に接したのは2、3回ほどであった。よほど精進が悪いのだろうって。良すぎてもよく無いそうですよ。ほどほどにして、今年は箱根のどこを狙おうかと思案しているところである。

岸　　葉子

「北大の実験室」

昨年銀座のノリエ画廊で個展をしましたが、同時期開催中の北翔展が黒百合会の中のグループの一つと伺って驚きました。昔私は農学部の昆虫教室で顕微鏡を見ながら虫の絵を描くことや英文タイプの練習をしていて、札幌の黒百合会展に出したことがありました。4号の「実験室」と題した小品でしたが、三雲先生にとても褒めて頂きました。私は“描いてしまったらあとは記録”を何もせずでしたから、行方不明になってしまいました。ところが十年程前に亡くなった母の遺品の中から出てきました。2000年札幌市の芸術の森美術館での「中根邸の画家たち」という展覧会に出しました。

私は中根邸の中の研究所で勉強したのです。今は芸術の森美術館に収まっています。

喜多　勲（名誉会員）

「エロシェンコ氏の像」

中世の宗教画は不信心な私にはただ虚しいのですが、題材でなく絵自体にもっと深い精神性を内蔵する絵、人の心に突き刺さってくる絵というものがあると思います。竹橋の近代美術館に見る中村ツネの「エロシェンコ氏の像」の、画面に溢れる高揚と憂愁は人の襟を正させるのもがあります。今私が自分で絵を描いて問題にしている事柄とレベルの異なる話ではありますが、絵というものはどこまで奥の深いものだろうと暫し絵筆を措いて考えました。

木綿　弘子

「青春」

2年前に舞い込んで来た東京黒百合会の案内がきっかけで、東京黒百合会のメンバーに入れていただきました。北大時代の黒百合会は、私の青春そのものでした。

今、ウン十年ぶりに青春しています。

よろしくお願いします。

工藤　長正

「黒百合は恋の花」

絵を始めて丁度15年。その契機と経過を辿ると、近所にある絵画教室の先輩から「東京黒百合会」の存在を知らされた事が大きい。そのご縁で彦田・池沢両先輩とは南仏旅行等を通じて、ご懇篤なご指導や国際公募展出品のお勧めを戴き、「サロン・ドトーンヌ」や「ル・サロン」にも出品を続けた。幸いフランス芸術家協会の会員推挙も得た。唄の文句じゃないけれど、絵心は恋ごころ、そして黒百合会は恋の花。多謝。

小石　浩治

「面構え」

石膏像「アグリッパ」をデッサンする機会があった。ローマ初代皇帝オクタビアヌスを支えた将軍だが、公衆浴場や水道橋を造るなど都市整備にも腕を振るったローマ人理想の人物である。後継者に悩む皇帝から懇願され、長年連れ添った

妻と別れてまで、娘婿となってその期待に応えた。一生をローマ帝国に捧げた男の胸像を描いているうち、実在の彫の深い、この顔で睨まれたら身がすくんでしまうが、もし笑って今の自分を見てくれたら､想像上のヴィーナスに微笑みかけられるより数倍嬉しく、男冥利に尽きるだろうと思った。

後藤　一雄

「自分をみつめる」

ものごころついた頃から絵が好きでした。親父の影響、小学校の先生の影響が多分にあったと思う。絵に向かい合うとき、まず何を表現しようか考え熟成させる。そして素材を集め組み立てる。それは、目分とは何かを追い求め、表現する事のように思える。

昨年から会の記録係を担当し、会員の作品をインターネットで紹介することや、今回の記念誌の編集と会と深く関わり始めた。良い機会を与えられたことに感謝している。

坂下　潔

「一泊写生会」

会の魅力的な行事の一つに、春秋の一泊写生会がある。

経験豊かな幹事が選んだ素晴らしい場所で描いたいくつかの絵に、心に強く残るものがある。私が参加したのは、春の白馬三山、秋の妙義山、春の西伊豆黄金崎海岸、秋の甲斐駒ヶ岳である。宿での夕食やスケッチの合評も楽しい。

佐々木　繁

「風景」

油絵を描き始めて4年が経ちますが、鎌倉、江ノ島など手軽に手に入る題材を充分に描き切れません。

将来は、感性が自然に絵から溢れ出るような素晴らしいものを、これらの地の風景画として描いていきたいと思っております。

佐々木　俊明

「絵＝色と形のハーモニー」

「最近、二つの対照的な絵画展を観た。藤島武二とカンディンスキー。全く異なる世界を追及している作品の前に佇みながら、両方に同じやり方でアプローチしている自分を感じていた。光が微妙に作用して現出される､色と形のハーモニー。対象が具体的であれ、抽象的であれ、作者が自分の心象を表現したかったのは、結局それではないのか。今、毎週通っている某文化センターでの人物画において、僕は、その事を中心に置きつつモデルに対峙している。

佐藤　義男

私は昭和50年に北大経済学部を卒業した佐藤義男です。大学の四年間、黒百合会に入っておりました。ただ在籍していたに過ぎないとも言えます。毎週（隔週？）行われていたクロッキー会は比較的よく参加しましたが､展覧会には一度も出品しませんでした｡ただ、だからと言って絵画に興味がないわけではけっしてなく、会社に入ってからはルーブル、オルセー、マルモッタンなどパリの美術館、あるいはミレーのバルビゾン、アムステルダムのゴッホ美術館などなど時間を見つけては見て回り、来るべきいつかに備えて、感性だけは磨いておこうと思っておりました。

そんなある日、何気なく会社のパソコンでヤフーから「黒百合会」と検索すると、何と懐かしい名前と美しい絵画がでてきたではないですか。それが今回、東京黒百合会入会のそもそもの発端でした。こんな風ですから、私が東京黒百合会のメンバーに名を連ねることには多少後ろめたい気持ちもあります。また、まだ一応（？）、会社でも管理職のはし

くれとして働いており、かつ子育ても途上で忙しい毎日ではありますが、まさに「忙中、閑有り」で時間を見つけて、これから絵筆を振るおう思っております。したがって自分の作品のストックは何もありません。どうかご了承ください。

あの美しい北大のキャンパス、そこで4年間過ごすことが出来た幸せ、そして黒百合会での人との出会いなどは楽しい思い出となって今でも心に刻まれております。

嶋田　勝弘

「次の10年に賭けるしかないか」

平成4年に東京黒百合会に入会し、翌年第2回北斗展のお仲間になった。ちょうど一昔の区切りを迎え、まだのんびりと絵を楽しんでいたい心境の一方、70才を過ぎ、ここで研鑽を積まなければ、このまま埋もれてしまうが、それでも良いのという、尻に火が着いたような焦りも強くなって来た。

考えてみれば、研鑽を積むのにまたと無い環境に恵まれたなか、次の10年、行ける処まで精進していきたいと考えている。

下田　修

「絵描きの願い」

七十歳を過ぎ会社勤めに限界を感じ何か「生涯の趣味」はないものかと考え初めて「絵を描く」世界に飛び込んだ。東京黒百合会にも入会させて貰い、今六年目。一生懸命描いているつもりだが、一向に上達しない。合評会には毎回トップバッターを志願して集中砲火を浴び、いつも歯がゆい思いをしている。しかし何とか私流の「堂々たる自然美を表現出来る絵を描く。」という望みを捨てずに、生涯努力して行く積もりでいる次第です。

首藤　義明

「山のスケッチ」

山歩きの楽しさを見つけました。こちらでは九重連山という恰好の場所があるからです。大田区ほどの広さの村に1800米近い山が10ヶはある。山間にはいくつもの平原があり、西千里、北千里、坊がつる、などと呼ばれる。右手には切り立った久住山の下方に遠く阿蘇外輪山が広がる。左には赤茶けた岩から紺碧の空に白煙を上げる硫黄山が頭上に迫る。四方が構図であり、ちょっと歩くとまた新しい構図に出会う。

杉山　直

「感動の出会いを求めて」

ヨーロッパを中心に毎年絵を描きに行き始めて10年を超えた。旅の楽しみは行く前と、旅先と、帰国後にある。絵を描くのも旅の楽しみ方と同じく3段階に分かれる。行く前は多くの本や写真集を見てその国のイメージを頭の中に徹底的に醸造する。

旅先ではそのイメージが大違いの時もあるが、イメージ通りの描きたい風景に出会うことが多い。旅先ではペンや鉛筆の線画が多いが現場の色や匂いを出来るだけ多く描き込む。帰国後は、旅先で出会ったその感動を絵にする。写真や本を参考に描けないこともないが、現場の線画は何物にも代えがたい。国内でも描きたい物を決めて徹底的に追い求めれば、自然に景色は語りかけてくる。

海外は特にその刺激が多い。今のうちにその“感動の出会い”をより多く蓄積したい。

杉山　マスミ

「本音の批評」

出来上がった作品の良悪を本音で聞きたいとつくづく思うが、本人の気持ちを慮っての言葉ばかり。そこで

先生の批評の真意を推し量ることとなる。よく出来た作品に対しては、眺めている時間が長く、「いいね」の一言。バックがいい、葉がいいと部分的に褒める時は大した出来ではない。出来の良くない作品に対しては眺める時間が短く、いまいちはっきりしない批評。これが私の結論。

大体どの先生にも当てはまっていませんか？

関谷　英一（名誉会員）

「私の絵を画く思い」

私は今、〝みずみずしく、単純明快〝ということを心掛けて絵を作っています。しかしなかなか思うようには行きませんが。

もう一つ、同じ場所で何回も何回も訪れて画いて、なんとか一枚納得の行くようなものを作りたいと思っております。

コケの一念かな！

染川　利吉

「感動を画面にぶつける」

著作物とは思想又は感情を創作的に表現したものという。うまい、へたの評価はその成立要件ではない。創作的にとは独創的にと言い換えてもよく、要するに人まねでない自分自身のオリジナルのものという意味である。

自分が感動したところのものを誰に遠慮することもなく、そのまま正直に画面にぶつけてみたい。まず自分自身が何かに感動すること、その心を高め、大切にしたいと、63才になった今、改めて心に刻んでいる。

建脇　勉

「冬山を描く」

若い頃から山を描き続けている。人物は難しいので描かない。木炭デッサンのみである。山は冬山が好きだ。大気が澄んでいて全てが透明だ。山肌も空も彩度が高くキリっとしている。山の重量感や厳正で包容力が自分を癒してくれ、絵心をわくわくさせてくれる。絵は心で描けと言われるのだが、自分の本能とこれが一致するのは稀である。今は作品に時間をかけて、その心を引き出しながら描くようにしている。

谷　岑夫

「今年から入会いたしました」

今年の3月の総会で会員に加えていただきました。昭和35年（第54回展）の主任幹事を引き受け、冬の迫る札幌の街を先輩まわりや広告集めに駆け回った記憶が蘇ります。肝心の絵のほうは理想ばかり高く、さっぱり腕が上がりませんでしたが、皮肉なことに丁度60年安保の騒然とした年の幹事役の経験は、その後、会社生活に少しは役立ったように思います。

これからは肩肘張らずに、純粋に絵画を楽しみたいと願っております。

田村　鉄弥

「恥ずかしい話」

35年くらい前であったか、当会の創立者である今は亡き石田哲郎先輩に、今考えても全く赤面の失礼なことを言った。

私『当会に所属していては絵は伸びませんね』と。

石田先輩は『本当の絵を描き、本当に絵を楽しみたいなら、当会で絵を描くべきだ』と言われた。

今、私は心から絵を楽しみ、先輩に感謝している。

長岡　英子

「楽しい黒百合会」

　東京黒百合会への入会を先輩である安孫子孝一伯父から誘われたのは96年のことでした。学生時代はクロッキー会に半年ほど通っただけの私には、黒百合会の名は眩く、光栄ながら、作品が描けるか不安を感じつつの入会でした。それから6年間、先生がいない自由な会風の中、自分の感覚第一を押し通し、自己満足の恐れを振り払い、作品を発表してきた自分に驚いています。

　迷いや限界を感じる時も、それが絵に深みを与えると信じ、描き続けたい。

中岡　三郎（名誉会員）

「心　境」

　もう第40回東京黒百合会展がくるのかと驚き、名誉会員になって面映く感じているうちに、番付が三番目になって、これまた驚いている。世の常としても、先輩方が亡くなられるのは淋しい。怠け者の上に体調が衰え、絵が描けなくなる。

　力士がよく「自分の相撲をとるだけです」と言いますが、私も「これからは私の絵を描くだけです」と言ってみたいものです。

中島　敏夫（名誉会員）

「東京黒百合会に入会して」

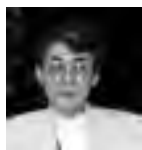
　「絵とは何か」などと言う難しい事はあまり考えていない。美しい風景や物などを、それなりに表現出来た時の喜びは格別ではあるが、なにより頭と手先を使う事による「ボケ防止」が第一の目的で入会させていただいた。

　加うるに老年になると社会との接触もだんだん少なくなるので、絵のグループを通じての人々とのおつき合いのできる事も有難い事と思っている。しかし写生会などへの参加は体力的にだんだん無理になるのは残念です。

西沢　昭子

「継続ということ」

　札幌南高校の「かすみ会」で油絵の具を買ってから40年、絵筆をもたなかったのはほんの数年で、細々ながらずっと描き続けてきた。上達とか進境ということにはほど遠いけれど、これだけ続くのは絵を描くことが自分に合っているのだろうと思っている。

　自分の好きなモチーフに向き合って、光と影、色と形、質感等「存在」との対話を重ねる中で、自分の精神が澄んでいく感覚が好きである。「もの」が発光し「わたし」も発光するような。

西村　幸二

「東京黒百合会との縁をもつまでの前史」

　小学生のころは姉、兄に次いで、絵のコンクールで入賞したりしましたが、中学二年か三年生のとき、それまで写生ばかりだった授業で「抽象画」を描くという課題を出されて作品不提出。最後は教諭に職員室に呼び出され「何でもいいから出せば今までどおり評価は五にします」と言われても応じず体操と同じ「三」評価になったという、今にして思えば、扱いにくい生徒だったろうとは思います。

　高校入学時に「芸術課目」は美術、音楽、そして書道。第一、第二志望とあったので、美術、音楽の順に記入して提出。その後に兄から「美術は写生などで校外に出て、適当に遊んだりできるから、志望者が多い。だから、第二志望は書かないほうがいい」と言われたが後の祭り。(この国の「芸術教育」の○○さを云々する以前のことともいえる？)。

　生物部に入り捕虫網で蝶を追いかけてい

たが、ある夜、奇妙な物音が聞こえ、確かめると胸部を圧迫して絶命させ、紙テープとピンで展翅した標本が息を吹き返して蠢いていた。その後は蝶は目視するだけのものになり、当時、興味を持ち始めてクレパスを使ってかなり熱心に絵を画くようになりました。

不思議なもので、当時、同じクラスでも殆ど付き合いのなかったのが、二年生の十一月にあった修学旅行で、急に親しくなった者がはじめて美術部の部長だと知り、世間的には受験勉強の開始時期だというのに、油彩画の用具を買ってもらい、放課後は、ほぼ石膏デッサンざんまいの日々に。

樋口　正毅

「山村に居を構えて」

山里の越後湯沢に居住して早や7年になろうとしている。

バブルの時代にリゾートマンションが林立し、高層建築が山肌にへばりつくように立ち並び、東京都湯沢町などと揶揄されている。

ここは海抜400m近い高地盆地で、山があまりにも近すぎて絵にするのが極めて難しいなどとへ理屈をつけて、年に一作という超寡作に甘んじている。

絵は90作描いてやっと自分の絵になると教えられたことがあるが、何時になったら到達出来るやら・・・・。

彦田　勇次（名誉会員）

「幻影」

昨年暮れ、重症の肺炎で入院、最強の抗生物質の点滴と酸素管をつけた状態で生死の境を彷徨っていた時、目を瞑ると、描きたくてどうしても描けなかった憧れの画像が見えてきた。

パウルクレーを思わせる美しい色彩と単純化された造形的構成があまりにも素晴らしく、作品にすることができたらどんなにか嬉しいかと目を凝らして見ようとしたが、画像は常に動いていて捉えところがなく、もう記憶に定かでなくなってしまった。

肥田　昇（名誉会員）

「日本の四季」

日本は四季の移り変わりがあって北海道から鹿児島まで実にいろいろ変化が観察され楽しい。冬枯れの色が春を迎えて若々しい新緑と変わり、さらに次第に濃い緑へと変化し、夏が過ぎると北から赤・黄・褐色の色づきが南下する。そして落葉すると木々の梢が現れ、やがて山頂が雪に覆われて青空にくっきりと白い山々が現れる。

私は早春の頃と晩秋の頃の色合いが好きである。

細井　真澄

「天空」

絵も人生も全て虚構の如き世界。それならば、自分らしく、楽しく、仲間と共に歳を重ね、自分なりのタッチでキャンバスを塗り尽くせたら、こんな幸せな事はありません。全てが再演不可能な初舞台、天空と言う自然の神に見守られ、気持ち一つで、悲劇を喜劇にも変える事が出来てしまう。

現実の世の中の厳しさに身も心もなえた時に、復活への不思議なパワーを与えてくれる“黒百合会”の仲間。絵を通じ、現在と言う今の時代を友に生き、楽しく語れ、過ごす事の出来る良き友に乾杯！

牧野　尊敏

「絵を描く思い」

絵を描くことは、半分は自己満足、後の半分はその否定。

「きれいに描けましたね」それだけの絵か。

「何を思って描いているのか」。

「この絵の魂は何か」。

絵とは絵具をもとに自己表現するもの。

「借り物だけの絵か、だめだよ、自分を忘れるなよ」

描いている時はいつも「存在感」を絵に託したいと思っている。しかし難しい。

40周年を機にさらに自己研修に務めたい。

松田　忠好

「至福の時間」

色彩やタッチに自由を感じさせるフォーブ風の絵に魅力を感じ、私もそのような絵を描きたいと長年思ってきましたが、どうやら自分にはそのような器用さは無い（才能が無い？）ことに気がつきました。

したがって、現場では出来るだけ多くスケッチをし、室内でFMやCDで主に協奏曲系のクラシックを聴きながら、じっくり時間をかけて油絵にすることが多い。

これが、いわば私の至福の時間です。

山田　哲男

「絵を描くこと」

絵を描く中で多くの発見や壁にぶつかり挑戦することで、様々な感動を得ることが出来ます。

絵を描く視点をもつことで、日常とは別の視点から、人生を味わうことが出来ます。

今、出来ないことに果敢に挑戦することも、絵を描く上では大きな楽しみだと思います。

横山　幹憲

「会員としての想い」

入会は友人のおかげで簡単でした。

しかし会員であり続けるには、絵に対する情熱を持ち、かなり切磋琢磨が必要と想います。合評会で鞭とエネルギーをいただき、頑張りたいです。

30回展記念誌を読み返すと、東京黒百合会の蘊蓄ある実力に驚きます。

絵に自分の感動と人生を表現出来たら素晴らしいと想います。

「坂道の秋」の絵は、脳硬塞で倒れる3ヶ月前、一泊二日の函館旅行に参加し、退院後の油絵第一作です。

柴野　道夫

「生きた絵を....」

じっくり山を描こうと安曇野に移り住んで早や5年。

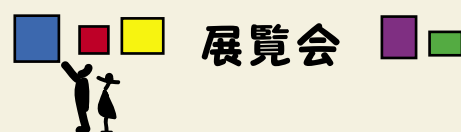
四季折々、朝に夕べに変化する山容は一日として同じでない。農作業で汗をふきふき眺める北アルプス、心地よく吹き抜ける緑のそよ風。郭公の鳴き声、蛙（かわず）の合唱、自然は生きている。生きて呼吸している。

イーゼルを立て、キャンバスに向かう。

まさに至福のひとときである。

生きた絵を描きたい。

筆を走らせながらいつもこのことを考えている。

発表と交流の場

青木　宏「N0109:Summer」油彩　F50

安孫子　園美　「白樺林」　日本画　　F20

石川　三千雄　「テーブル上の果物」
油彩　F20

泉　和男　「敦賀港C岸壁」　油彩　F20

江木　博　「岩尾根の岬」　水彩　P20

江澤　昌江　「花と小さな虫」　水彩　F20

遠藤　博（名誉会員）「作品」 油彩　F20

大武　八郎（名誉会員）「逆光のマツテイラの町の裏通り（南部イタリー）」 油彩　F30

大谷　敏久（名誉会員）「サンモリッツ」
水彩　F60

笠原　寛 「山麓の春」 油彩　F80

鍛冶　弘 「ミューズ川ミニ・クルーズ」
油彩　F15

加藤　文男 「晩秋の妙義山」 油彩　F80

菊池　誠作（名誉会員）「箱根の山々」
油彩　F12

岸　葉子「演奏」油彩　SM

喜多　勲（名誉会員）「ツムトの里」
油彩　F60

木綿　弘子「ニコライ堂にて」油彩　F20

工藤　長正　「絵心は旅ごころ」　水彩　F10

小石　浩治　「魚のかくれんぼ」油彩　F10

後藤　一雄　「崩壊」
デジタルイメージ　F30

坂下　潔　「秋の甲斐駒ヶ岳」　油彩　P12

佐々木　繁　「江ノ島ヨットハーバー」
油彩　F10

佐々木　俊明　「いもり池（妙高）」　油彩　F20

柴野　道夫　「早春の梓川」　油彩　F20

嶋田　勝弘　「黄金崎」　油彩　F20

下田　修　奥石廊崎　油彩　F30

首藤　義明　「九州の高原」　油彩　F100

杉山　直　「印象（スイス）」　水彩　F30

杉山　マスミ　「柿」　油彩　F6

関谷　英一（名誉会員）「ピラミッド風景」
油彩　P20

染川　利吉　「風化」　油彩　F30

建脇　勉　「八ケ岳厳冬」　油彩　F80

谷　岑夫　「メア・ブッシュの朝」
フェルトペン　F4

田村　鉄弥　「夜想曲」油彩　F50

長岡　英子　「若い人」油彩　F20

中岡　三郎（名誉会員）「群雀」　油彩　F10

中島　敏夫（名誉会員）「真駒内公園の秋」
油彩　F6

西沢　昭子「洋蘭」油彩　F10

西村　幸二「亞」油彩　F10

樋口　正毅　「錦秋魚野川」　油彩　F30

彦田　勇次（名誉会員）　サントロペ
油彩　F50

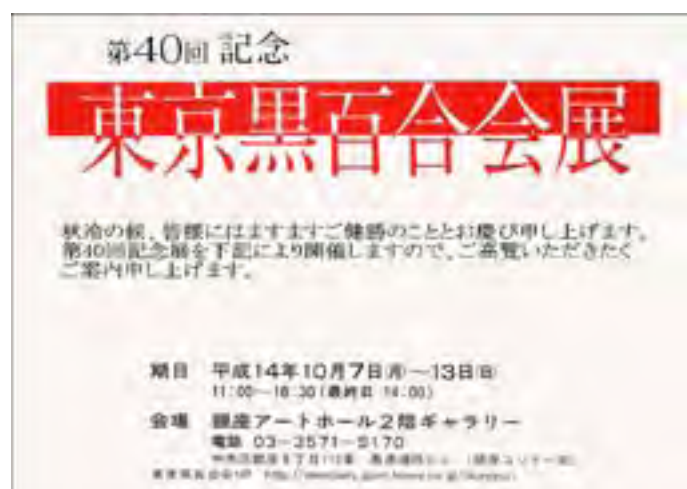
肥田　昇（名誉会員）「キャンパスの秋」　油彩　F10

細井真澄　「天空」　油彩　F8

牧野　尊敏　「静寂」　油彩　P15

松田　忠好　「古利根暮色」　油彩　F6

山田　哲男　「裸のかぐや姫と3人の求婚者たち」　油彩　F120

横山　幹憲　「坂道の秋」　油彩　F10

原田三夫さんについて

原田さんは黒百合会の創立会員で、札幌農学校で発起人になり、有島武郎さんを中心に黒百合会を発足させた。原田さんは科学ジャーナリストとして著名で、科学画報、子供の科学を発刊したり、宇宙旅行協会を創立して火星の土地を売り出すなど奇抜なことをやられた。昭和 31 年に第 1 回東京黒百合会展を開催した折には進んで参加され、8 回展まで出品され、昭和 47 年頃に逝去された。原田さんは本会の異色の大先輩であろう。

作品名　自画像

松山茂助さんについて

松山さんは札幌農学校で有島武郎さんから水彩画の指導を受け、黒百合会展に出品された。大学を卒業してサッポロビールに入社し、社長、会長を務められた。この間油絵を熱心に描かれていて光風会展には4-5回入選され、絵の力量は玄人はだしであった。東京黒百合会展には進んで参加され、本会の会長を引き受けられた、きさくな人柄で、多くの人々から慕われており本会の誇りとする大先輩であろう。

作品名　プラグ市展望（油彩）

下條正康さんについて

下條さんは武蔵野美大のデザイン科を卒業し、デザイン関係の仕事をしておられたが、お兄さんの菊次郎さん［北大農学部卒］の紹介で本会に入会された。下條さんが東京黒百合会展に出品されたのは第 10 回展［昭和 49 年］からで、昭和 60 年に亡くなるまでの 22 回展まで毎年出品されていた。下條さんは山をこよなく愛し、山岳風景に傑作を残されている。

作品名　常念の春（水彩　B5）

小川信一さんについて

小川さんは大正 15 年医学部 1 期の卒業で、北大黒百合会の OB でもある。東京黒百合会第1回展を開催した昭和31年に北大医学部教授をやめて東京で開業された。このため本会展には第 1 回展から、逝去される前年の 24 回展まで出品された。小川さんは優れた画才に恵まれ、また東京黒百合会を愛し、本会会員であることを誇りにされていた。独立展には 9 回も連続入選されており、春陽会の小川マリさんは妹さんである。

作品名　バラ（油彩　F4）

石田哲郎さんについて

石田さんは東京黒百合会の創立者であり、現状の本会のシステム例えばグループ展、一泊写生会、デッサン会や集団指導体制のアイディアは全て石田さんによるものである。石田さんは昭和 15 年北大農学部農経学科卒業で、北大黒百合会で活躍された。東京黒百合会を発足させたのは北大黒百合会時代が余程楽しかったからであろう。石田さんは平成 2 年に逝去されたが、このような良い会を残してくれたことに感謝したい。

作品名　佃大橋（水彩　F4）

池田芳郎さんについて

池田さんは一高、東大に進まれた秀才で、九大につぎ北大の教授となり、北大黒百合会展に出品された。その後防衛大学教授として東京にこられ東京黒百合会展には 3 回展から 27 回展まで連続出品された。平成 3 年に逝去された、96 才であった。池田さんは青山義男画伯と親交があり、青山さんの先生のマチスの影響を受けている。また池田さんは 90 才で立派な記念画集を残されている。

作品名　バラ　（油彩）

元田茂さんについて

元田さんは昭和8年北大農学部動物学科卒業、プランクトン研究で北大水産学部の教授となり、定年後は東海大教授となる。東京黒百合会展には第16回展［昭和53年］から32回展まで出品され、33回展の平成7年に逝去された、享年87才。元田さんはプランクトンの権威者で職務柄海と船を盛んに描かれ、立派な画集「船と港」を残された。なお元田さんは熱心なクリスチャンで人柄も温厚な方であった。（油彩　「船と港」画集より）

作品名　フリーマントル

福田安平さんについて

福田さんは北大出身者ではないが、国鉄の管理医師で大武八郎さんと同じ職場であったので、大武さんの推挙で入会された。本会への入会は早く5回展［昭和43年］からで、ほとんど休まず逝去される前年の34回展［平成8年］まで出品された。絵に対する取り組みがまじめで、大洋会の会員にもなり大作を手掛けている。またロイヤルサロン銀座で本格的な個展を開催し、立派な画集を残しておられる。

作品名　赤いスカート（油彩　F15）

島津備愛さんについて

島津さんは北大理学部物理学科の昭和16年卒業で、専門は分光学で農工大、東邦大の教授を務められた。東京黒百合会には絵を始めて10年程経った平成元年に入会され、平成8年まで活躍されたが、平成9年に逝去された、享年79才。入会されて8年程度であったが、写生会、合評会には熱心に参加され、構図のしっかりした美しい作品を発表され、また島津さんは温厚な人柄で会員からも慕われていた。

作品名　静物（油絵　F10）

布施敞一郎さんについて

布施さんは北大工学部土木学科の昭和 14 年卒業で、北大黒百合会の OB である。東京黒百合会は20回展から33回展まで出品され、それ以降はお病気のため出品されておらず、平成 10 年に逝去された。布施さんは水彩画が得意で、とくに軽いタッチで描くエンピツスケッチが上手であった。布施さんは港湾土木の専門家であったので、合評会では橋の絵の構造をしっかり描かないとやかましく言われた。

作品名　イギリス風景（鉛筆デッサン）

福原三郎さんについて

福原さんは昭和 12 年北大工学部機械学科卒業で、北大黒百合会で活躍され、東京黒百合会の発足期には石田哲郎さんを助け、展覧会幹事や会報幹事を進んで引き受けられた。福原さんは東京黒百合会の運営については独自の積極的見解をもっておられ、私加藤にもいろいろアドバイスをいただいた。名誉会員を何年かやられ、平成 11 年に逝去された。

作品名　ヒマラヤ　クオンクデ（油彩　F30）

石田博さんについて

石田さんは昭和 10 年北大農学部農芸化学卒業で、北大黒百合会の OB 会員である。東京黒百合会展には第 4 回展以降、一度も休まず、逝去される前年の 37 回展まで出品されている。石田さんは本会の模範的な会員であり、また人柄の良い最長老者として会員の尊敬を受けておられたが、平成 11 年に逝去された。享年 90 才であった。遺作の水蓮は最後の展覧会に出品した傑作である。

作品名　水蓮［明治神宮］（油彩　F20）

柴田芳文さんについて

柴田さんは二高、東大出身で、サッポロビールに勤められ、同社前社長で本会の大先輩の松山茂助さんの勧めにより本会に入会された。本会展への出品は16回展［昭和53年］からだが、仕事の関係で10年程休み、30回展から37回展まで出品されている、平成12年に逝去された。柴田さんはキャンピングカーを乗り回して全国の山々を画きつづけ、また付き合いが広く年間6回もの展覧会に出品されていた。遺作の武甲山は最後の傑作である。

作品名　武甲山新雪（油彩　F50）

阿部顕さんについて

阿部さんは北大理学部地鉱学科を昭和10年卒業で、東京黒百合会には23回展以降37回展まで一度も休まず出品されている。阿部さんは本会を愛され、熱心な模範的な会員であった。晩年は耳が遠く、会話にも不自由であったが、これにもめげず重たい荷物をもって一泊写生会に参加されていた。平成12年に逝去された、享年88才である。

作品名　伊豆白浜の滞砂垣（油彩　F30）

岡澤廣二さんについて

岡澤さんは北大農学部農芸化学科を昭和13年に卒業され、北大黒百合会のOBである。東京黒百合会展には1回展から37回展まで1度も休まず出品された。1回展の会場は岡澤さんのお世話によるもので、本会発足の恩人でもある。平成13年に逝去され、享年87才である。岡澤さんは本会をこよなく愛され、本会をお楽しみ村とよんでおられた。東京黒百合会の楽しく自由な雰囲気は岡澤さんの人柄によるところが大きい。

作品名　瞑想（水彩　F12）

岡克明さんについて

岡さんは北大農学部農芸化学科を昭和13年に卒業され、北大黒百合会のOBである。東京黒百合会では5回展から31回展まで出品されたが、ご病気で絵が描けないため退会された。神戸に移転される折に、今までに描かれた作品を私達に預けて行かれた。平成13年に逝去されたが、改めて遺作を見直したところすばらしい作品なので、インターネット遺作展をやり、これを会で保存することにした。これは岡さんの人徳によるものであろう。

作品名　白樺湖（油絵　F10）

安孫子孝一さんについて

安孫子さんは北大農学部農学科を昭和11年に卒業され、北大黒百合会で活躍された。東京黒百合会展には3回展以降38回展まで出品されている。平成14年1月に逝去され、享年90才である。安孫子さんの晩年の作品は極めて個性的かつ情熱的であり、大家のように自信に満ちている。本会をこよなく愛された安孫子さんは、本会のことを「心を裸にして向かい合える場であり、個性が乱舞する小宇宙」と言われた。

作品名　チャペル（油絵　F20）

天国の先輩とその作品について

天国におられる先輩として17名の方を掲載させていただいたが、これらの方以外にも大條方義、橋谷義孝、小池政男、角倉邦彦、桜井忠次、江幡三郎、真嶋恭雄の方々がおられる。

しかしこれらの方は遺族の方々との連絡がつかない等の理由から本誌に掲載できないのが残念である。

なお先輩の遺作そのものを会で保存することは無理なので、水彩の小品を除き全てをカラーコピー等写真で保存することにしている。第40回展に展示する石田哲郎さん、下條正康さんの水彩の遺作は加藤所有のものを会に寄贈したものである。

加藤文男

スケッチ会

アトリエ訪問

総　会

私と会報

彦田勇次

私が突然会報を担当するように言われたのは平成2年2月18日の運営委員会の席であった。

前任の遠藤さんの時から会報は左右二段編集のB5サイズになっていてそのまま踏襲しようと思ったが、お恥ずかしい次第でこの齢までワープロには手を触れたこともなく、戸惑ってしまった。

どんなワープロが適当かも分からぬまま取りあえず一番先に目についたシャープのWD-A330と説明ビデオを購入した。

空白のスペースを少なくし且つ読み易くするためには左右二段にするのが好ましいが、通常のやり方では1ヶ所でも訂正すると左右の行がごちゃごちゃに入り交じってどうにもならなくなる。

試行錯誤の結果、取扱説明書の中に枠編集の機能があるので、文書を入力して文書ファイルに一旦登録しておいて、枠編集のモードに切り換え、 中央に印字されない縦線を入れて先に登録した文書を呼び出し流し込めば左右二段編集が出来ることが解った。

枠編集する前に、一行の字数を二段に分けた時の字数に合わせておいて入力した文章の奇数頁と次頁一組毎に行間ピッチを加減して無駄な余白を残さず、紙面の体裁を整えることができることも知った。

初めての会報が年度替わりの4月号からで、総会記事の決算報告や予算案など表の作成に慣れぬことで苦労してやっと期日に間に合わせることが出来た。

折角取扱ビデオを購入したものの会報の編集には何の役にも立たず、結局分厚い取扱説明書と首っ引きであった。

編集の仕事は長い会社業務の中でも一度も経験したことがなく、前任者から引き継ぎの際、会報は会員だけでなく会員以外の人の目にも触れるものだから言葉遣い、誤字脱字や紙面の体裁（見出しがぽつんと紙面の最後に取り残されるようなこと）などみっともないものにならないようにといろいろ注意され、甚だ心許なかったが引き受けた以上、会報が会の発展に役立つよう出来るだけのことはしようと覚悟を決めた。

なお互いの交流を深めるため会員以外に北大美術部黒百合会、さっぽろ黒百合会、にも毎月送ることにした。

会報のお知らせの欄で、東京黒百合会の諸行事（東京黒百合会展、春秋の一泊写生会、各グループ展、合評会、運営委員会、総会等）のお知らせを前月号に載せ、当月号に載せてないと読者が日時を忘れがちになることを考慮して、発行日を月初めの一日として、その日までには必着するよう発送することにした。

もっとも東京黒百合会展と一泊写生会は準備する都合があるのでそれに応じた予告もすることにした。

会員消息の欄には会員の個展、公募展への出品のお知らせ等も洩れなく載せるよう心掛けていたが、入選、受賞等の決まるのが遅く、月遅れになってしまったこともあった。

また会員の方で遠慮してご通知のない方もいるかも知れないので、各公募展が毎年大体同じ月に行われることから前年度の同月号を参照してご本人に電話で確かめた。なお会員各位から出品作品をみた感想文が寄せられるので編集にも張り合いが出て楽しくなってきた。

行事報告の欄でも各行事の幹事からの原稿が滞りなく届けられ、最初うまく纏まるか不安であった編集もやっているうちに慣れてきて少しも億劫でなくなった。

第11回北廸展から後藤さん編集になるカラー紹介を折り込んでいたが、安価にカラー

コピーが出来るようになり、平成9年度の各グループ展の行事報告からは各展出品者全員の代表作一人一点ずつカラーコピーしたものを載せるようにした。

平成7年度の総会でこれまで随筆欄は筆者が、次の人を指名するようになっていたのが、「私のモチーフ」という題で会の名簿順に絵と文を毎号載せることに決まった。

会員の方々からねぎらいのお言葉を頂いた時は本当に会報編集をやっていて良かったと思う反面、編集終了時期間際に入った情報のため、編集し直して慌てて校正し発行することがしばしばで、取り返しのつかない校正ミスをしてしまいはしないかといつも気掛かりだったが、十年間どうやら大過なく勤めることが出来てほっとしている次第である。

エルムと黒百合

小石浩治

私は東京黒百合会分会の「エルム写生会」にも参加している。

この会は会員の奥様で絵に興味ある方たちの集まりで、月一回写生に出かけて外光を楽しもうと言って始まったものと聞いている。

現在、担当幹事の遠藤さんは写生地を事前にチエックして参加者を案内してくれる。学校やOB等に関係ない構成で今や総員20名(内男性4名)の大所帯となり、写生日を2回に分ける程までに成長した。

この機会に私は参加者と一緒に絵の基本技法を学ぼうと思い立ち、遠藤さん、大谷さんに講師をお願いし、併せて自分の勉強のために市販の入門書から「上達するコツ」を選び、ワンポイント方式で毎月皆にプリント配布して来た。それが写生会会報「エルム水彩」である。今春で40号を越した。

会報作りの資料を集め、また写生会に参加しているうち気が付いたことがある。

一つは「入門書どおり描いていると、実は型にはまった絵が描けただけで、いずれ面白くなくなって来るだろう」ということだ。参考書はあくまで絵に親しむための手引きであり案内書である。

例えば、水を含み過ぎて滲みが出来た時、他の色をのせたら「思わぬ効果」を発見する。それを「失敗」と思わず「発見」と思って、それを自分のものとした時、真に絵を描く楽しさを味わう事が出来るし、案内書を離れて自立制作出来る。

もう一つは会報上で説明できないことを月一回顔を会わせ、話すことで、実証しフォローすることが出来ることだ。活字だけではご婦人達は満足しない。

一方、本業の黒百合会会報については、会員各位の原稿をひたすらに待ち、転記するだけなので、「編集者です」とはとても恥ずかしくていえない。まして顔を会わせ、会話するのは精々合評会の時くらいで、残る方々とは名簿上のおつき合いが主という現状である。

諸先輩の画法、技術などを吸収し、教えを乞いたい筆者にとっては「顔を合わせ話しをし、教えていただく」機会が少ないのが、なによりも残念である。

現状では本展、グループ展等当該会員の作品を全部見て、作者の制作意図をお聞きしたわけでは無いので顔と作品が一致せず、どうしても印象が薄くなる。といってもこれは機

関誌、文集、小冊子等の持つ宿命かもしれない。

昨今、PCの世界ではこちらが打電すれば先方は受け取った旨の返信をすることが常識になっていると聞く。その例に倣って会報を発行したら、掲載された人以外の会員から「今月の特集は面白かった」とか「俺の作品動機は」とかの返信、反応があると、発行者は嬉しいものだ。それに応えて、次号発行にも意欲が湧いて来る。

更に諸先輩の制作上の成功談、失敗談など聞かせてくれたらどんなに楽しいか。そうなればもっと活気ある、臨場感のある生きた会報になるだろう。

私は平成12年4月号から会報担当を彦田先輩から引き継いだ。彦田先輩の几帳面で寸分狂いのない紙面づくりには遠く及ばず、誤字、脱字のご叱責を受けながらともかく月1回発行している。この10月で通巻208号となる。諸先輩のおかげで実に17年余り続いて来た。来年は紙上キャンパスで自由を謳歌する18才の学生時代に似た時期に相当する。今年は40周年。「描く心」を刺激し「冒険心」を昂揚させるような紙面を作っていく節目の年だと自戒している。

そのためには会員各位の絵に関する忌憚ないご意見、ご感想を積極的にお聞かせいただきたい。更に「読者のページ」を企画し、家族の方の積極的な投稿参加（文章、スケッチなど）を期待しているが、どんなものであろう。家族の評は厳しくとも楽しく、絵画制作のよき理解者となり、会報がより身近かな存在になるだろう。

そうすれば「我が東京黒百合会会報は永遠に不滅です！」と声高に叫ばなくとも楡（エルム）のように静かに深く根を張り、黒百合のように絵に「恋する花」を咲かせて、世代を越えた､愛される「東京黒百合会会報」になると信じている。

エルム写生会について

遠藤　博

昭和50年代のことと思うが、石田哲郎さんの発案で、北大同窓生の中で絵を始めたい人にその機会を提供しようということになり、エルム新聞に写生会開催の広告を出してもらった。

ところが当日集まって来た方々は同窓生ではなく、すべて奥様方であったのには一寸驚かされた。

なるほど考えて見れば、定年後の方はともかく、現役の勤めがあれば、平日の写生会などに参加出来るわけがない。そこで私たちも腹を決めて同窓生家族OKということにして、写生会を実行する運びとなった。

初めの二、三回は同窓会事務の坂下さんなどが心配して集まり具合を見に来ていたが、参加メンバーの奥様方がけっこう熱心で、やがて10名前後の参加者数が安定して続くようになった。

そのうち何年か経つうちに、転居や病気などで止める人もあり、また逆にメンバーの友人、知人などで新しく入会する人も増えて来て、現在では必ずしも北大関係のサークルとは言えない状態となっている。

かってスケッチの指導は石田哲郎さんが中心で、私はオブザーバーか野次馬のような形で参加していたので、石田さんが亡くなられた時点で写生会は自然消滅するものと思っていたのだが、会員の方々がぜひ存続してもらいたいということで、やむを得ず私が替わりにお世話することになり現在に至っている。なお数年前から黒百合会の大谷さんや小石さんが参加されて、合評会などでも大変有益な批評や助言をしてくださるので、私も大いに助かっている。

写生会の会場は皆さんの希望でほとんど公園が中心となっているが、同じ場所ではスケッチポイントが品切れとなり、また好奇心も薄れるので、どうしても新しい場所を探さなければならない。

この場所探しが私の主な仕事なのだが、東京都内だけで絵になるような公園がそう沢山あるわけでもなく、地図やガイドブックを頼りにあちこち歩き回ってはいるのだが、思うように収穫が得られず、このことが目下の頭痛の種となっている。

この写生会の作品発表が「エルム水彩展」という名称で続いているが、これは必ずしも水彩画の展覧会ということではなく、たまたま水彩でスケッチする人が多かったというだけのことで、実際には現在も、油絵でも日本画でも良いことになっている。

デッサン会

佐々木俊明

東京黒百合会で、裸婦デッサン会が再会して二年目に入りました。凡そ１５年位の中断があって、漸く、と言った感じです。問題は、いい場所を見つけることが出来なかったのでした。良い場所、と言うのは、描く方にとっても又モデルさんにとっても、と言う意味です。そこで思い出すのは、学生時代、学校の部室で毎週集まって描いていた頃のことです。凡そ清潔さとは縁の無い、汚れきった物置のような部屋。そして、真冬のこと。ストーブがぎりぎりの石炭をくべてどうやら寒さが凌げるような状態の部屋。今にして思えば、よくもまあモデルさんたちは我慢して来てくれていたと思います。それでも、熱気の溢れる部屋の中で、黙々と取り組んだものでした。

さて、現在僕が感じるのは、モデルさんたちの素晴らしいことです。体格も容貌も、微動だにしない決まったポーズも当時では信じられなかった位です。景色の場合は、自分の好きな構図や対象を選んであちこち歩き回り、好い所を決められるのですが、デッサン会ではこちらの希望が殆どの場合利きません。ですから、所謂芸術的な意欲さえ全く湧かないようなモデルさんに出会う機会も、昔はあったのです。贅沢は言えないので目をつぶって描いていましたが....

余談はさて置き、この長くて２０分、短いのは１０分のデッサンのことを「ああ、クロッキーね」と軽く言われる方が居られる。それでも構いませんが、所謂石膏のデッサンが本当のデッサンだ、と思われているのでしょうか。消したり描いたり、長い時間をかけて出来上がるのだけがデッサンでもないのではないでしょうか。２０分は結構長く、そして短い

時間なのです。又、５分と言った非常に短い時間であっても、その間に対象を捉え、描き切る事が求められているのです。其処に「居る」女性の形、光と影のハーモニー、柔らかさ、強さ、等など自分が見、感じたあらゆるものを、線で切り取り、面で捉え、限られた時間内で自分の画帳に固定するのです。

そして､それこそが野外や室内での写生､或いは抽象的題材の絵画においても同じく非常に重要な位置を占める、デッサンの基礎になるのです。デッサンの出来ていない絵は、恐らく人を感動させることは出来ない、と言っても過言ではないでしょう。風景では望まない木立は無視したり、移植したり可能ですが、人体デッサンではそれを許しません。対象である裸体の美しさを、光と陰を自分の領分で有る画帳の中に如何に納めるか、そしてその輝く肌を、コントゥアをどう描きとめるか、殆ど無限に近い遠くに有るゴールを目指して、約一月置きの例会に僕は勇んで出かけるのです。尚、現在会場は代々木に在る新日鉄の代々木倶楽部です。

会費は一人３０００円です。若干高いのが難点ですが、此れも参加者数が増えると、半額に成る可能性も高いのです。どうぞ皆さんも是非参加してみてください。

合評会（10 年の歩み）

青木　宏

前回の記念誌以後の合評会の様子を、現在の幹事の立場で以下に記す。

合評会は毎年度共通した形で、5 月、7 月、9 月、12 月、2 月の 5 回催されてきた。会場は以前から幹事であった遠藤さんの関係で、平成4年から9年中半までは二高会談話室(新宿）で、それ以後は大谷さんの関係で新日鉄山谷寮 OB 談話室（代々木）に移り、現在にいたっている。

尤もその間に山谷寮の改築があり、その期間は東京エルム会クラーク記念室(高田馬場)を借りていた。改築後は新日鉄代々木倶楽部として、同じく代々木で催されている。

合評会の幹事は、以前からの継続で平成 8 年までは遠藤さん、同 9 年度は大谷さんと遠藤さんが、10 年度は筆者と加藤さん、11 年度からは筆者と小石さんが担当してきた。

合評会の幹事を長年やってきた遠藤さんは、会報 85 号 (平成 4 年 8 月) に、「合評会の意義」と題して随筆を書いているので、ここにその一部を要約してみる。

『自分の絵の欠点を指摘されることは不愉快だが、それを乗り越えなければ絵の上達は望めない。ただし造形作品の評価については絶対的、客観的な基準や法則はないのであって、芸術は感覚の所産であり、すぐれて主観的なものだ。感覚は人によって異なり、そこには共通性も普遍性もないのであって誰かが自分の絵を批評したとしても、その人の見方が客観的に正しいという保証はどこにもない。では他人の批評など何の価値も無いかというと、そうではない。大事なことは、他人の意見を自分の中でどう調整するかである。

芸術的感覚は人によりまちまちであるが、

絵の場合は　〝美の追究〞という共通の指標がある。このある程度の共通性、普遍性を土台に批評すれば、それほど大きな意見の違いは出てこないのではないか。合評会ではいつも話題になるのが絵の記録性の問題だ。現実そのものの再現を重視するか、画面の芸術性を重視するか、それは各人の好みの問題だ。後者を追求していけば、必然的に抽象表現に行きつく筈である。芸術創作というものは各人の主観の表出であり、その結果として出て来る作品に関しても、絶対的な評価の基準などは存在しないのが当然だろう。ただ、現実重視の記録性の濃い作品でも、画面は絵としての美しさを具有していなければならない。』

以上、筆者も遠藤さんの随筆にある通りだと同感する。ここで彼の言う現実重視の記録性の濃い作品とは、要するにリアルな、写実的な絵のことである。この場合はある程度の共通性、普遍性を土台に批評すれば、大きな違いは出てこない。一方、画面の芸術性を重視していけば、必然的に抽象表現に行きつくと彼は言う。この方向に向かうと、まさに主観の比率が圧倒的に多くなるが、合評会に関する限り前者の部類に属する作品が主体であるから、お互いの批評すなわち合評がうまく成り立つている。

世の中には色々な形の絵画教室がある。有名な画家に師事するという形から、上野の各公募展が開催している研究会、さらにはカルチャーセンターや何とか絵画教室という初心者相手のものまでその数は多いが、そのどれも会のリーダー格の先生がいる。

ところが我が合評会にはその先生がいない。これが合評会の最大の特徴であり長所である。年令や卒業年次の違いはあるが、こと絵に関しては全くの同列であり、お互いに同感の点や疑問点を述べ合うのが実態である。

従ってそれぞれ自分の個性に立った見方をし、批評をするわけで、その内容も多岐にわたる。

Ａの意見とＢの意見が異なることも珍しくない。自分の作品を前にして飛び交う様々な批評や意見のなかから、自分の感性にぴったりくるものを参考にして画いて行けばよい。

このようにして合評会は参加者の個性を伸ばす形で、それぞれの作品の上達に貢献して来たものと自負している。

そしてこのような合評会を作り上げた背後には、遠藤さんをはじめ、岡澤さん、安孫子さん等の諸先輩の力が大きく働いていたことを改めてここに挙げておきたい。

ただ、上述の自由な発言をより完全なものにするための努力は今後とも必要である。

特に非写実的な絵を画く若手の会員も、魅力を感じるような内容に進化することが今後の合評会の目標であろう。

一泊写生会

建脇　勉

この会は第30回展記念誌の「一泊写生会、加藤文男さん文」によれば、昭和50年頃から石田哲郎さんが始められ、春秋2回毎年続けられて定例化されて現在にいたっている。

会の幹事として遠藤博さん､加藤文男さん、

首藤義明さん、岡克明さん、関谷英一さんが何年か毎に正副二人が担当され、現在下田修さん、建脇勉が受けている。

スケッチ場所の選定については、会員にとって魅力ある所が大切であるが、過去の事例を参考に諸先輩と相談して決めている。過去の実績一覧表を添付した。

事例として春は海､秋は山となっているが、花の時期に合わせた一の宮や更埴等の例もある。高齢者も参加されるので、あまり遠い所は避け、午前中に現地に着ける距離が限度と思われる。遠い所では開田村の御嶽山や西伊豆の漁港等がある。以前に行った場所で魅力のある所を再度選ばれることもあり、スケッチポイントが分かっている点で安心である。また高名画家のポイントを狙って計画することも多々あった。駅からスケッチポイントが遠い場合、バスかタクシーを利用せざるを得ないが、下田修さんが幹事になられた頃から車組がその送迎に協力するようになって、時間とエネルギーの節約になっている。白馬、鵜原、妙義山など参加者に喜ばれた事例がある。参加者の最高は西伊豆と妙義山の 19 名で、場所の魅力が引力になったと思われる。

近年は十数人で安定している。場所によってはご家族も参加されている。夕食後に合評会が行われている。酒も入ってのことで皆さん感ずるままに発言され活溌な意見交換が楽しい。幹事として当日の天気が良く無事終了した時、安堵する。天気予報で期待出来ない日でも一瞬の間でカバーすることも出来、雨天決行となっている。現役の方が参加し易いこともあり､現在春は 4 月～ 5 月の（金）（土）を、秋は 10 月の（金）（土）を選んでいる。リタイヤされた方も多数おられることもあって、当面今のままでと考えている。

今後とも魅力ある場所の選定や交通の便を考え、より多くの方が参加する会にしたいと思っている。

年	季　節	場　所	月　日	宿　泊	人数
昭54	春	犬吠埼	4月21		
	秋	信濃追分	10月27	緑蔭庭	
55	春	箱　根	4月26	石川島播磨箱根クラブ	13
	秋	谷川岳	10月11	民宿　見晴荘	
56	春	御　宿	4月25	民宿　いしい荘	11
	秋	妙義山	10月31	民宿　上州	16
57	春	真　鶴	4月24	真鶴ケープパレス	14
	秋	秩　父	10月23	民宿　巴川荘	
58	春	太海浜	4月21	江沢館	
	秋	清春　芸術村	10月22	芸術村	
59	春	子　浦	5月19	民宿　吸海楼	
	秋	明　科	11月3	町営　長峰荘	
60	春	熱　海	5月7	美芳館	4
	秋	芦ノ湖	11月９	民宿　静湖荘	11
61	春	熱　海	5月24	美芳館	7
	秋	奥日光	10月4	戦場ヶ原山荘	
62	春	勝　浦	5月9	国民宿舎鳴海（ナルカ）荘	14
	秋	湯　沢	11月7	民宿　大峰山荘	9
63	春	伊　浜	5月14	民宿　めぐみ荘	14
	秋	御嶽山	10月29	開田村　民宿のらくろ	13
平 1	春	須　崎	4月15	温泉民宿　源兵屋	14
	秋	妙義山	10月28	ひしや旅館	13
2	春	安良里	4月14	民宿　サカイ	19
	秋	安曇野	10月27	ロッジ赤い屋根	17
3	春	真　鶴	4月20	民宿　ともみ	17
	秋	日野春	10月12	志満屋旅館	5
4	春	西伊豆宇久須	4月25	民宿　千代田荘	8
	秋	榛名湖	10月17	伊香保　徳田旅館	8
5	春	太　海	4月24	ホテル江沢館	9
	秋	安曇野	10月30	民宿　赤い屋根	6
6	春	南伊豆　須崎	4月23	民宿　源兵屋	8
	秋	安曇野	10月29	民宿　赤い屋根	6
7	春	熱　海	4月22	KKR　龍泉閣	8
	秋	御嶽山	10月28	ペンションのらくろ	7
8	春	一の宮桃の花	4月12	勝沼　民宿　鈴木園	8
	秋	上牧　谷川岳	11月15	KKR　水上　水明荘	6
9	春	南伊豆白浜	4月18	民宿　白浜荘	10
	秋	八ヶ岳	11月7	町営　美し森たかね荘	10
10	春	あんずの里	4月12	更埴市　民宿　近藤荘	4
	秋	裏 磐 梯	10月23	民宿　吉春	12
11	春	白　馬	4月16	民宿　久保田館	18
	秋	妙高高原	10月22	KKR　白樺荘	14
12	春	鵜原理想郷	5月12	民宿　勘五郎	14
	秋	妙義山	10月27	東雲館	15
13	春	西伊豆宇久須	5月11	民宿　千代田荘	18
	秋	甲斐駒	10月25	志満屋旅館	14
14	春	犬吠埼	5月17	銚子わかしお	15
	秋				

「東京黒百合会グループ展の由来」

加藤文男

編集註:本文は平成12年会報6月号(N0179)に掲載されたものを再録した。なお、その後故人となられた方もあり一部修正した。

東京黒百合会のなかにグループ展を作ろうというアイデアは、当会創立者である故石田哲郎さんによるものである。石田さんの考えでは年間一回だけの本展では発表の機会が少ないので、五つくらいのグループ展を作って積極的に発表する機会をもった方が良いというものである。

これにより腕をあげ、会のレベルアップにもなるとと考えたようだ。

設立するグループ展のそれぞれの性格については、予め決めず、リーダー役の人が中心となり、自主的にメンバーを決めるやり方がとられた。

しかし会によってはリーダー役がいないため、かわりに石田さんがメンバーを斡旋して作ったグループ展があるが、これは一つくらいしかない。

★　まずトップをきって昭和49年に、石田さんがリーダー役となり、遠藤博さん、故石田博さん、故安孫子孝一さん、故岡克明さん、大武八郎さんなどの熟年組を集めて【北窓展】を発足させた。

★　これにならい、昭和50年に【北陽展】が発足したが、2回展以降は加藤がリーダー役となり、メンバーを再編し、故下條正康さん、青木宏さん、田村鉄弥さん、池沢康夫さん、柴野道夫さんと中堅クラスのベテランを寄せ集めた。(註：池沢さんは北海道へ転居)

★　昭和54年には、本会の重鎮であった故小川信一さんをかつぎだし、故福原三郎さんがリーダー役となり、故岡澤廣二さん、彦田勇次さんなど熟年組を集めて【北楡展】を発足させた。その後中堅クラスの工藤長正さん、建脇勉さんが世話役として参加した。

★　昭和58年には若手リーダー格であった刀禰和夫さんが中心となり、首藤義明さん、細井真澄さん、山田哲男さん、後藤一雄さん、西村幸二さん、江澤昌江さんなど若手メンバーを動員して【北廸展】が発足した。

★　昭和59年には北大出身者でない熱心な会員である笠原寛さん、菊池誠作さん、田淵定人さん、故福田安平さんを中核とする【北香展】が発足した。

もっともこの会には北大出身の故元田茂さん、中岡三郎さん、佐々木俊明さんも参加された。この会の発足についてはリーダー役不在のため、石田哲郎さんがメンバーを斡旋するなど支援した。

★　平成5年に関谷英一さんがリーダー役になり、大谷敏久さん、杉山マスミさん、故布施敞一郎さん、故桜井忠次さんなどのメンバーが集まり【北斗展】が発足した。

ところで北窓展、北楡展、北陽展は回を重ねるにつれて、メンバーが亡くなられたりやめたりして、数が減少したため、グループの再編が必要になり、この三つのグループ展を解散して、平成5年度から新たに北晨展と北翔展を発足させることにした。

★　【北晨展】は遠藤さんがリーダー役になり北窓展と北楡展に所属する熟年メンバーを引き継いだ。メンバーは前述の方々のほか、故阿部顕さん、故島津備愛さんがおられた。なお中堅メンバーの建脇勉さんは世話役とし

て残った。

★ 【北翔展】は加藤がリーダー役となり、北陽展のメンバーのほか、北楡展からの移行を希望された工藤さん、彦田さんを含め、概ね中堅クラスのメンバーで再発足した。

以上、五つのグループ展の設立の経緯について説明したが、このグループ展は設立後かなりの年月を経ており、メンバーに若干の変動があるが、中核メンバーが健在なのでその特色は変わらず、今後とも続けられていくことを期待している。

なお、当初の狙いである会のレベルアップは果たされつつあると思う。

［グループ展発足一覧］

「北晨展について」

建脇　勉

北晨展は平成５年度に発足した。人数の関係で以前あった北窓展・北楡展などを合体して北晨展となったものである。

発足時はキャリアの永いベテランが主で、石田博さん、安孫子孝一さん、遠藤博さん、岡澤廣二さん、阿部顕さん、大武八郎さん、島津備愛さん､末席に建脇勉の８名であった。

本年で第10回展を迎えるが、この間、残念ながら５名の方が亡くなられ、新人と入れ代わっている。

島津さん第５回展まで、石田さん、岡澤さん、阿部さん、安孫子さんは第７回展まで出展された。

島津さんの静物、石田さんの蓮池の作品、岡澤さんの梨、仏像、花シリーズ、阿部さんの力強い風景、安孫子さんの花、風景、皆様素晴らしい作品を残されて旅立たれた。新しく下田修さんが第６回展から、横山幹憲さんが第８回展から、江木博さん、松田忠好さん、中島敏夫さんが９回展より参加され現在８名となっている。

毎年6月上旬に開かれており､会場は第1回から３回展まで有楽橋画廊、その後室町ギャラリーに移り、現在に至っている。

ここは銀座から離れているが、交通の便も良く安価で、オーナーが好んで飾り付けや達筆でラベルを書いてくれる等親切である。

幹事は島津さんが第１回展から第５回展まで担当され、その後建脇が引き継いでいる。

出品点数はほぼ26点前後で、４号から30号の主として油彩であるが水彩もある。

現在のメンバーでは、遠藤さんの抽象的に単純化された風景画、大武さんのオーソドックスな油彩技術を駆使した情緒的な欧州風景､下田さんの元気のある港風景､江木さんの個性のある構図の水彩風景、横山さんの繊細なタッチの風景、人物、松田さんの透き通った色彩の水辺風景、中島さんの几帳面なタッチの風景、建脇の発散的未完の山、皆様個性豊かに作品を追及されており、今後とも各人の挑発的作品の披露とご意見を戴く場でありたいと願っている。

「北翔展について」

加藤文男

グループ展も回を重ねるにつれて、メンバーが亡くなられたりして数が減少したため、グループ展の再編成を行い、平成5年度から北陽展と北楡展を解散し、統合して新たに北翔展を発足させた。

メンバーは北陽展から加藤文男、青木宏、柴野道夫、田村鉄弥の4人が移り北楡展から工藤長正、彦田勇次の2人が移行した。

北翔展の第一回展はこの6人で、場所は有楽橋画廊で開催した。

この展覧会は早いもので、今年で10回展を迎える。

展覧会場は3回展以降八重洲の三興画廊に移り、今日に至っている。

メンバーは8回展以降工藤長正、田村鉄弥の2人が抜け、4回展から牧野尊敏さんが参加し、8回展から鍛冶弘さんが参加した。

10回展から岸葉子、泉和男の2人が参加したが、泉さんは病気のため今年は参加出来ない。

次ぎにメンバーについて説明したい。
青木宏さんは北陽展時代から累計して今年で27回も出品している。

作品は抽象絵画であるが、5回展頃から完全抽象の方向に向かっている。
大胆なタッチと美しい色彩にひかれる。

加藤文男さん※は北陽展1回展からの連続出品者で、28回の出品になる。
加藤さんの最近の作品は、色と線の新しい造形美を模索しているように思われる。
(※この部分は青木宏さん記)
柴野道夫さんも北陽展時代を含め27回の出品である。定年後に郷里の安曇野に住み、郷土の山々を描いている。ベテランの作品がさらに磨きがかかってきている。
彦田勇次さんは北楡展時代を含め14回の出品となる。彦田さんの作品は繊細に描かれ、また感動の表現にすぐれている。

牧野尊敏さんは4回展からの参加で7回目の出品となる。牧野さんは双樹会会員で同展に大作を出品し力量を上げてきている。

鍛冶弘さんはまだ3回目の出品であるが、キャリア不足を感じさせないうまさがあり、先行きが楽しみだ。

岸葉子さんは今回始めての参加であるが、春陽会の会員でありベテランなのでこの会を盛り上げてくれるものと期待している。

ベテランの田村鉄弥、工藤長正の2人がこの会をやめられたのは残念だが、田村さんは親友として良く付き合ってくれたことに感謝したい。

「北香展について」

中岡三郎

石田哲郎さんから、北大の人に限らずに、広く同好の士を集めるようにとのことで、まず、菊池、福田に話しがあった由である。

日記を見ると、1983年8月22日（第21回東京黒百合会展の初日）のところに「石田さんと話す」とだけある。

思い出せば「一寸来いや」と近所の喫茶店に誘われ「黒百合会展は年に一度のお祭りみたいなもので、本当に絵を描くなら、少人数のグループを作って勉強することをすすめる」と言われた。他の方々にもそれぞれお話しがあったものと思う。幹事役を菊池が引き受け、一年の間に話しは具体化され、北香会は誕生した。「北窓」「北楡」など「北」の字を冠するグループのしんがりだと思う。

第一回北香展は1984年（昭和59年）10月9日～14日の間、赤坂の「三幸画廊」で開催された。会員は元田、福田、田淵、山根、菊池、笠原、佐々木(俊)、中岡の8名であった。

「三幸画廊」はこじんまりとした店で、一階に各人10号を2～3点、中二階に小品1～2点を飾る壁面があった。くじを引いて場所を決めた。達筆の田淵が看板と名札を書き、目録は笠原の厚意によった。かなりの数の作品が寄せられた。残念なことに今目録を失っている。風景が多かったように思う。元田の船と海、佐々木（俊）の「鯵」、笠原の「好日」という題の故郷の風景を思い出す。しかし自分が何を出したか全く思い出せない。初めてのグループ展の雰囲気に、私は圧倒されていたようである。会期中は他のグループの方々やそれぞれの知人が大勢来られ、最終日には東京黒百合会の先輩方に批評をお願いし、小コンパがあった。

以上、第一回展の思い出である。

その後、佐々木（俊）が勤務で渡米し、しばらく出品出来なかった。日高が入会、しかしすぐ退会した。「三幸画廊」が都合で止めるまで、9回の長い間、菊池が幹事を続けた。赤坂は場所柄、知人の他に昼時には界隈の人々も訪ねて来た。第10～11回展は山根が幹事で、日本橋の「砂翁」で行われた。落ち着いた場所であったが、やや狭い感じがした。第12回から幹事は田淵で、「三興画廊」に移った。

ここは今迄で最も広く、大作を飾ることが出来た。この間、元田が亡くなられ、つづいて福田が亡くなられた。喜多、林が入会した。

第14回から中岡が幹事となった。1998年（平成10年）は画廊の都合で残念ながら北香展は中止となった。会場を1999年（平成11年）から日本橋の「室町画廊」に移し、第15回展とした。第16回展から笠原幹事となった。山根退会、石川入会、第17回展は田淵、林退会、のち染川、西沢入会。

現在2002年は西沢、染川、石川、喜多、菊池、笠原、佐々木（俊）、中岡が会員で秋に第18回展を迎える。顧みると、石田先輩の方針通り北香会は立派に育った。各自、作品は個性的に発展し、公募展に入選し会員になった人もいる。当初の半数が会を去られ淋しいが、新しい風が加わり、北香会は更に発展を続けると思う。母体東京黒百合会が今秋、第40回展を迎えること、誠にご同慶の至りである。

（敬称略）

「北斗展について」

嶋田勝弘

1990年の年末近く、関谷さんが更に研鑽を積まんものと各分科会にあたって見ていたところ、いずれも満杯でいかがしたものかと思案していた。折よく、加藤さんから新しいグループ展開設を勧められ、渡りに船と早速同志をつのり、大谷、桜井、杉山（マ)、布施の4人と関谷さんの5人展で発足した。名前も加藤さんの提案で「北斗展」ときまった。かくして、第一回展は平成3年6月24日から日本橋ギャラリー「砂翁」で開催された。

出品は豪華なメンバーに相応しく

・大谷敏久：裏通り（ロンドン）50F、卓上静物20F、早春（神代植物園）6F、春（御苑）10F、春風（洗足池）6F

・桜井仲次：真鶴風景15号、山村風景10F、バラ8F、婦人像8F

・杉山マスミ：花のドレスで15F、若い人12F、コスモス10F、安曇野の秋10F

・関谷英一：カンポンアライ風景15F、シャブリン砦風景15F、クワランプール風景8F、港風景8F

・布施敬一郎：安曇野にて6F、真鶴漁港6F、蝦夷駒33×27cm、エジンバラ寸描

出展作21品で来観の署名者だけで119名を数え、初回から成功裡に終了したと言えよう。

2回展から10回展

2回展は出品計24点で各同人の個性がはっきりして全体としても纏まりをみせてきたが、誠に残念なことに、3回展では桜井忠次さんが亡くなられ、急遽、ご遺作「山肌の秋」を展示する仕儀となった。

その代わりとは到底言えないが、全くの新人として嶋田が加えられた。（出展計24点）

4回展では残された5人の気合いが乗り、30号、20号あるいは12号の大、中作8点を含む22点が展示された。

5回展では気鋭の小石さんが新人として加わり、益々バラエティーに富むようになってきた。（出展計21点）

6回展から北斗展創設以来長く幹事を務めていただいた関谷さんから大谷さんにバトンがわたされた。軽妙なタッチで参観者を魅了されてきた布施さんが出展を中断されたが、他の同人が穴を埋めた。中でも小石さんは25号、15号各2点、他に8号、6号の計7点という力闘で、北斗展全体としても出展数27点という空前の充実ぶりを示した。

7回展からはベテラン肥田さんが新たに加わり同人は6人となり、良く言えば落ち着きを取り戻し、出展も20点に止まった。

8回展から坂下さんが加わり、同人は7名、出品も24点に回復した。この年、年末にかけて嶋田が脳溢血で倒れたが、9回展にはなんとか復帰した。

9回展は出展計23点であった。杉山さんが前年20号×2点を含む計3点であったのが、この年も30号×2点を含む4点のいずれも目を見張る力作であった。

しかしながら、翌10回展は国内留学、絵の研鑽に努め、北斗展出展は1年間の休みとなった。

10回展からは大谷さんから嶋田が幹事を引き継ぎ、出展も22点と杉山さんの穴もバランス良く埋めることが出来た。とりわけ関谷さんの現地での力作「妙高山初秋」「階段ピラミッド」の評価が高かった様である。

最近の北斗展

11回展以降は杉山さんが復帰し、7人展にもどった。ところが出展数も23点と変わらないし、一人当り3ないし4点の出展で号数も絞られて、大作の競演という風でもなく来

ていながら、各同人の絵が変わってきた。

関谷さんの言葉を借りると、てんでんバラバラに新しい主張を始めたようだと言うのである。11回展の作品で極めて主観的ながら述べると、小石さんの「壁」、杉山さんの「柿」、関谷さんの「ムカッタム丘の石切り場から」で、その意図が伺える。

12回展で言うと、総出展23点のうち、大谷さんの4点全てデッサンで、今後なされるであろう新しい主張を全てに秘めている、と言える。小石さんの「神事の前」は彼の追求する「動作する人物画像」の新しい前哨であろうし、坂下さんの大胆な構図の「静物」。杉山さんの前回の「柿」と並ぶ「洋梨」の小品の魅力、関谷さんの「朝／昼のピラミッド」。肥田さんの思いきった省略で切り開いた「横浜山下公園」の新しい境地がそれだと思う。

北斗展、次の「10年」の更なる飛躍に夢を馳せて筆を置く。

「北廸展について」

山田哲男

今年で18回目を迎える北廸展は、1984年に、当時東京黒百合会の若手メンバー中心のグループ展として発足しました。20代、30代のメンバーでスタートしたグループが、ここまで続けてこられた事は大変なことだと思います。ただ残念なことは、現在でも北廸展が東京黒百合会の中で最も若いグループ展であり、若手、新人を取りこむ事に必ずしも成功していない事です。18年の歴史の中では、20代の若手メンバーも参加していた時期もありましたが、継続することはなかなか難しい様で、出品を中断している人が多くいます。　現在のメンバー構成は、発足時からの5人（西村、後藤、細井、山田、江澤）と杉山（直)、佐々木（繁)、長岡、木綿、佐藤（義）の10名です。（木綿さんは18回展から、佐藤さんは来年から参加）20代、30代の若手メンバーが定着してくれればと、常に門戸を開放しているのですが、なかなか思うようにはいかないものです。

現在は、40代、50代が中心となった北廸展で、依然として現役の働き盛りの年代が中心になっておりますので、運営そのものが厳しいのですが、メンバーが各々、可能な範囲で運営に協力することで、継続しております。

今後も、あまり肩に力を入れず、淡々と継続していく中で、何か味が出てくるのではないかと期待しています。又、忙しさの為に中断しているメンバーや、若手のメンバーの参加も、期待したいと思います。

「絵を見るということ」

青木　宏

絵を見る立場の第一は、いわゆる絵を鑑賞する立場だ。

第二は、自ら作家として絵を見る立場、そして第三は絵画史ないしは美学的に絵を見る立場である。勿論これらは画然と区別されるものではない。本稿を読む会員諸兄は、第二の立場が主体となるだろう。

第三の立場も大きな懐をもっている。回を重ねるうちに芸術としての絵を感じられるようになる。

私が絵を見て初めての「芸術」を体験したのは、昭和20年代末のある晩秋、当時としては最大級のルオー展が上野の美術館で催された時の事であった。

作品を見て行くうちに次第に意識が高揚し、レリーフのように盛り上がって描かれている黄金の夕陽と、今、この美術館を照らしている実際の夕日と、一体どちらが真実の太陽なのか....。

北大を卒業して憧れの美術の都、東京に就職したばかりの私にとってこれはまことに不思議な体験であった。会場の混雑もいつの間にか消しとんでしまい、文字通り茫然自失したその時のことは今も鮮明に覚えている。宗教体験という言葉があるが、その表現を借りるならば、まさに芸術体験、正確には絵画体験ということだろう。自己脱落の状態である。

その後何度もルオーを見たが、このように強烈な体験は後にも先にもこの時だけであった。その頃私が求めていたものと、作家や作品の波長がまさにジャストミートしたためとしか考えられない。それに感受性の強い当時の年齢が多分に関係していたことにもよるだろう。

国吉泰雄の本格的な遺作展、ダリの大きな展覧会、ワイエスの個展、あるいはニューヨーク派の抽象表現の代表作を一堂に集めた大展覧会等会期中に何度も出かけて夢中になった画展は数知れない。

それぞれに感動はしたが、いづれも静的な感動で、先述のようなダイナミック反応ではなかった。

北大路魯山人ではないが絵にも料理にも、個人にはそれを味わう自ずから得意な分野がある。一人の人が全てのタイプの絵を、本当に評価するのは難しい。それは絵が語りかけてくる言葉を聞き分ける耳が完全でないことと、その背後にある好みの心理とが綯い交ぜになっているためであろう。

好き嫌いの激しい私などは最たるもので、困ったものだ。

中川一政は絵をかき、詩をかき、書をかきまた文をかいた。

私も感動した。それが何回か彼の個展を見ているうちに、何か気になるものが生まれてきた。そんな折、梅原の絵を見た。そこには中川の気になるものがない。中川は最後まで体当たりで自分の美を追求し続けた立派な作家であった。ただ、騒々しさが残る。梅原は更に上の存在ということなのだ。

私にとっては、一流の作家達がもつそれぞれの器量の差を実感した貴重な体験であった。

同じ作家なのに、年代によって絵の良し悪しがまるで異なるのは興味深い。

若い頃の三岸節子は、戦後の日本洋画界をリードした一人にふさわしい、素晴らしい絵を画いた。東山魁夷も北欧に取材した当時の一連の作品には、高い精神性を伴って素晴らしいものがある。

しかし両人とも齢を重ね、社会的な富と名声が身についてくるにつれて絵が貧しくなったのは、一体どういうことなのか。

このような現象は、画壇では実にありふれ

たことである。

そこに「芸術の問題」があるように思われる。

ある水準以上の絵の評価になると、その価値を決めるものは、その作品を画いた前後の作家の姿勢というか、心の在り方以外の何ものでもない。

その点、阿部さんの資料 (会報 94 号) による青山義雄（下記　朝日新聞抜粋参照）などは、すべてを突き抜けた最高の地位にある。心から敬服する。

こんなわけで、「絵の良し悪しは、最終的には作家の心の問題に戻る」という、東京黒百合会の創始者である石田哲郎さんの言葉は、最近とくに実感されることが多い。

-63. 9. 16 付 -　朝日新聞抜粋

「余白を語る」

青山義雄さん

92 才で帰国（大正 11 年渡仏)、離婚 --

じぶんの勉強ができれば良い。死ぬのは何処でも良いから、どっちに転んでもよい、と旅費だけためて行ったんだ。帰化したわけではないし、日本は好きだよ。この春、展覧会（鎌倉近代美術館）を開いてもらったが帰ってみると、仕事するより人に会う事ばっかり。妻とは帰国をきっかけに「別れます」というから、一緒にいることが不満なのなら、その方が、それはケッコウということになった。妻の両親もここ（茅ヶ崎市）に引き取っていたのだが、性格が合わないというのかな。いくつになっても合うというのはむつかしい。マチスに「君はいい色をもっている」といわれ、お世辞でもよい、こちら先生より 25 才も若いんだ、教えてもらって頑張ろう .... とね。マチスは君の色は美しいが奥行きがない。奥行きを学べ、と言った。先生が死んだあとも、自分の絵が少しでも良くなればマチスのおかげだと思えばよい、と今日まで、やって来た。パリに長くいるといろいろな人（日本人）が訪ねて来たが、大体勉強している人はこない、引っ込んでいるから。くるのは勉強しない人、知り合って得しようというだけの人で、時間を取られてね。帰国してからもそうだ。友人は少しになっているが、絵かきは自分を“大家だ、大家だ”というから面倒くさくていかん。画商は、これと同じもの（南仏風景）を 2 枚描いてくれとせがむ。強引はありがたいが、絵は一枚一枚創造しているんだ、そんなことしていたらおかしくなる。実にわずらわしい。有名で嬉しい人はそれにこしたことはない。が、ここでは有名な人と本当の画家とは別のようだ。向こうの方が鈍（どん）でいい、日本は鋭敏で頭が良すぎる。うるさい。

・・・生きている間は人間、
芸術家は死んでからなるべし・・・

絵かきは展覧会も死んでからやってもらうのがよい。あんなことをしていると絵を描くひまがない。

スーチンもモジリアーニも無名で死んだ。

絵を描いている人は自己宣伝するひまなど、生きているうちはないよ。絵かきなんてのは死んでも絵が残るんだからいいですよ。残らなくても自分の好きなことして来たのだしね。佐伯祐三のように二十代で仕事する人もいるし、私はのろまに生きてきたと思うが、思い残してもしかたがない。マチスとの交流など書き残せ、と言う人もいるがそんなことはいらない。時間が残り少ないのだから絵だけよくしたい。

・・・一部だけの絵かきでなく、
身体まるごと絵かき・・・

まだ 94 才と八カ月、元気なうちに誰にもわずらわされないところで絵を描きたいから、また 26 日に”戻る”ことにした。せっかく帰ったんだが。冷水マッサージと二百数える逆立ちやっているから(その場で逆立ちすごい)、目と耳が少し悪い程度だ。のこのこもどってくることになるかもしれないが、一度じっくり勉強したい。死ぬ所はどこでもよい。どっちに転んでも同じだ。

以上

「世にも不思議な絵画グループ東京黒百合会」

田村鉄弥

日本の絵画人口は、世界の同人口の過半数以上を占め、その団体も有名な公募団体から趣味の同好会に至るまで、誠に多く、その集まりの動機もプロの同じ絵画思想による集まりから社交的な集まりまで、実に様々である。

これら絵画グループの推移を見ていると、私が五十年近く前に地方で所属していたチャーチル会のような大人の会は別にして、大体会が大きくなると、ある段階から決まって綻びが出て、離合集散を繰り返している。理由は主に絵の評価が賞の選考から端を発し絵画論争に発展することなどによるが、背景に運営や人間関係もあって様々である。

ところで当会はどうかと言えば、この会は不安定要素が一杯ある。

まず入会者がこの会に求めていることは様々で、ある人は絵を教えてもらって上手になりたい。合評会などで切磋琢磨されたい。すでにあるレベルに達しているが、更に上の方に挑戦するステップにしたい。絵の友達がほしい。気楽に発表する機会があるから。本当の絵を描きたい。自分を見つめたい。ただ絵が好きで楽しみたい。

まだいろいろあるし、これらが漠然と重複している人もいて、実に多様だ。

このように一人一人希望を異にした会員を抱え、その数も数十人、しかも今回 40 回展を迎え、分裂どころかますます内容を充実し、隆盛の道を歩んでいるこの会は、世にも不思議な集まりであるように私には映る。

一体この会の正体は何なんだろう。

そんなことは暗黙のうちに皆肌で感じて知っていることながら、将来とも楽しい会であって欲しいので、願望の意味もあり敢えてその理由を三つ挙げてみた。

一、これは申すまでもなく会を運営している方々が実に聡明、献身、誠実、謙虚であることに尽きるのであるが、併せてその運営も、当会は前記のとおり様々な希望を持っている方の集まりであるが、それらの方々にいろいろお応えしながら、その一つにあまり片寄らず、相互に調和を保ち、且つ後記当会の本来の姿から逸脱することなく、凡てに強制的でなく、自由の雰囲気を尊重しながら運営していることで、 全く頭が下がる。

二、絵画思想について現代絵画は三か四の主流があると言われているが、普通どの会でも何時しか一つの絵画思想が支配的になる傾向がある。ところが当会は全くいづれの絵画思想にも片寄らないで、各々の考え方で描き、皆生き生きと共存している。

三、次に述べることこそ他の会との違う点と思うのだが、私がかって実に多くの二流同好絵画グループ展を見た経験から言えば、上手な絵を志向し技術を競い、他人に褒められたいという会が多く、更に有名公募展に入選し名を挙げたい、そしてそのための下請け的な空気が漂っている会も多いように見受ける。

ところが当会はそれも決して否定はしないが寧ろ超然とした雰囲気の方が強く、皆各々自分のものを持っていて、それを基として、自分の絵を描きたい、本当の絵を描きたい、或いは好きな絵を描いて楽しみたいという流れの方が基調にあって、作品も「我が道を行く」という絵が多い。これは或いは特殊なことではないとも思われるが、世間一般は俗気の風が吹いているのに、当会は爽やかな微風が心地よく流れているのはやはり珍しい会と言えそう。

他にあまり見られないこのような気風が醸成された過程を考えると、これは今に始まったことではなく、当会創立当初からあった先

輩の薫陶で、当初私はこのことにあまり好感を持っていなかったが、今はこの気風が私を惹き付けている。

この他私がこの会に惹かれる最大のものは、このような雰囲気が身に着いている先輩を始めとして会員皆夫々何か持っていて絵を描いている。而して人間としても実に魅力を湛えている方々の集まりだからだ。このようなことで一見まとまりの悪そうな会ながら、以上を背景とした信頼と魅力で皆この会が好きで、気持ちが結びついているように思う。

時代は移り人も変わってゆく。変わって欲しくないものと変わって欲しいものとある。

絵については、故安孫子先輩の言うように、小宇宙の感を呈するように挑戦、変貌して欲しく、前記当会の本来の姿は、今後ともあまり変わって欲しくないと思っている。

東京黒百合会会則

（平成11年4月１日改正）

1. 総則（大綱）
（1）本会は北大美術部出身者（北大黒百合会出身者）及びその家族、友人、知人等により構成される。
（2）本会は職業、身分、年齢、卒業年次、画歴等の別け隔てなく、仲良く、楽しく、自由に、誠実・謙虚に良い作品の創造をめざす絵の会である。

2. 会員
（1）北大美術部出身者以外の者を会員とする場合には会員2人以上の推薦を必要とする。
（2）80才以上の会員で、本会に原則として10年以上在籍した者を総会承認を経て名誉会員とする。
（3）会員は次の事由により資格を失う。
　(A) 退会・死亡・除名
　(B) 東京黒百合会展に2年以上不出品で、会費をことわりなく未納の場合
　(C) 会の秩序を乱したと運営委員会が判断した場合
（4）会員で地方赴任、出産、病気等のため会の活動に参加できない者を休眠会員として名簿の末尾に掲載し、いずれ復帰を期待する。
（5）退会については、本人の意向を打診のうえ決定する。

3. 会費・入会金
（1）会員の入会金は3,000円、年会費は6,000円とする。
（2）名誉会員は年会費を3,000円とする。展覧会の出品料は免除されない。（但し平成2年度以前に名誉会員になった者は年会費を免除する。）
（3）休眠会員は会費を徴収しない。
（4）旧会員や休眠会員が会員に復帰する時は入会金を徴収しない。
（5）退会及び除名の場合には入会金・年会費は返却しない。
（6）病気により東京黒百合会展に出品できない会員については、申請により年会費を3,000円にすることができる。但し名誉会員の場合には年会費を免除する。
（7）東京黒百合会展以降の入会者については入会金のみ徴収し、当年度の年会費は免除する。

4. 行事
（1）年1回の東京黒百合会展を開催する。
東京黒百合会展の出品作品は自作の絵画のみとする。
（2）春、秋年2回の1泊写生会を開催する。
（3）年4回程度の日帰り写生会を開催する。
（4）年6回程度の合評会を開催する。
（5）毎月「東京黒百合会会報」を発行し、行事の連絡と報告、会員の消息その他を掲載する。
（6）会員の自主的活動として、北晨展、北翔展、北廸展、北香展、北斗展等の小グループ展を設け、それぞれ年1回の展覧会を開催する。
（7）上記のうち会報の費用は会が負担する。東京黒百合会展及び写生会には会から助成金を支出するが、いずれの行事も独立会計とし、必要な経費は出品料、参加費等でまかなう。

5. 委員・幹事
（1）本会に次の委員及び幹事をおく。
運営委員、総務幹事（事務局）、会計幹事、会報幹事、記録幹事、展覧会幹事、1泊写生会幹事、日帰り写生会幹事、合評会幹事
（2）本会には会長、運営委員長をおかない。その代わり業務、行事に関する責任はそれぞれの担当幹事が分担する。各部門の幹事が2人以上いる場合には代表幹事（主責任者）を定める。
（3）運営委員は代表幹事全員（1人の場合はその幹事）と若干名のベテラン会員として、15名程度とする。
（4）委員、幹事の任期は1ヵ年とする。再任をさまたげないが、できるだけ持ち回りとする。但し記録幹事は兼任・再任を認め、任期5年とする。

6. 総会・運営委員会
（1）総会は最高の決議機関で年1回3月に行い、事業及び会計の報告、新年度の事業計画、予算の承認及び会則の作成・改正、委員・幹事の改選、入会・退会の報告等を決議承認する。
（2）運営委員会は総会前及び必要により開催し、会の運営上の重要な問題について審議する。総会提出原案は同委員会の審議を経て提出する。
（3）総会の決議は出席者の過半数とし、可否同数の時は議長が決するものとする。議長は互選により決める。
（4）総会欠席者は委任状を提出したものとみなす。

7. 総務
総務幹事（事務局）は入会・退会・除名等の人事、会記念行事の企画・推進、会則の作成・改正等を担当するほか、会の業務を総括し、会議の招集及び運営の任に当たる。

8. 会計
（1）会計年度は4月1日から翌年の3月31日までとする。
（2）会計幹事は展覧会会計も兼務し、経理事務を行うとともに随時公表できるように努め、資産をも管理する。
（3）会の資産は次のとおりとする。
会費、入会金、行事に伴う収入、予約金、立て替え金、寄付金及び資産から生ずる利子。

9. 記録
記録幹事は総会議案、会報、本会展の案内状、出品目録、感想文、記念誌、本会展の画集等を過去にさかのぼり収集し保管する。また本会の亡くなられた先輩の思い出の作品コピーを保管する。幹事を交替する時は必ず保管資料を引き継ぐ。

10. 内規
（1）年会費は原則として総会時に納入する。
（2）総会欠席その他の都合で年会費未納の会員は4月末までに本会の銀行口座に振り込む。
（3）各担当幹事に年度初めに仮払いされた予算については、年度末には必ず会計幹事に支出明細（領収書を添付する）・残高について報告する。
（4）会の業務・行事で発生する通信費、印刷代、その他の費用のうち会で負担すべきものは請求にもとづき会計が支出する。
（5）代表幹事が都合により運営委員会に出席できない時は、関係の幹事に代理出席を依頼することができる。
（6）会員死亡の場合には、本会名で生花1個をおくる。
（7）会員入院の時には、1万円以内の見舞金をおくる。
（8）高齢者の展覧会時の絵の搬入出の運送業者の手配等については世話人を決める。
（9）緊急時における連絡ルートは次のとおりとする。
総務幹事　→→5グループ展幹事→各メンバー
　　　　　　└→グループ展無所属の会員
（10）作品制作上参考となる記事等は会報の別刷り版として随時発行する。

出品記録

	回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	出品回数
	氏名　＼年次	31			42	43	44	45	46	47	48	49	50	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
1	遠藤　博	*		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		38
2	加藤文男				*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		36
3	青木　宏				*		*		*	*		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*			*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		31
4	田村鉄弥				*	*	*									*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		28
5	杉山　直				*														*	*	*		*					*										*	*	*		9
6	佐々木俊明				*	*															*	*									*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		14
7	大武八郎					*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		35
8	笠原　寛					*	*	*			*	*	*			*	*	*		*				*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		27
9	中岡三郎					*	*	*	*	*					*	*					*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		27
10	彦田勇次						*	*		*	*					*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		29
11	西村幸二									*	*	*						*	*	*			*	*	*	*	*	*	*	*	*	*				*	*			*		19
12	菊池誠作											*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		29
13	柴野道夫											*	*	*	*		*				*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		25
14	首藤義明																*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		24
15	後藤一雄																	*	*	*	*	*	*	*	*	*		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		22
16	山田哲男																			*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		20
17	細井真澄																				*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		20
18	江澤　昌江																						*		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		17
19	安孫子園美																							*	*					*	*	*	*	*				*	*	*		10
20	工藤長正																										*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		14
21	杉山マスミ																										*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		14
22	建脇　勉																										*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		14
23	関谷英一																											*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		13
24	大谷敏久																												*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		12
25	西沢昭子																												*	*	*	*	*	*	*		*	*	*	*		11
26	嶋田勝弘																														*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		10
27	肥田　昇																															*	*	*	*	*	*	*	*	*		9
28	喜多　勲																																*	*	*	*	*	*	*	*		8
29	小石浩治																																*	*	*	*	*	*	*	*		8
30	牧野尊敏																																*	*	*	*	*	*	*	*		8
31	坂下　潔																																	*	*	*	*	*	*	*		7
32	樋口正毅																																	*	*	*	*		*	*		6
33	長岡英子																																		*	*	*	*	*	*		6
34	下田　修																																			*	*	*	*	*		5
35	横山幹憲																																			*	*	*	*	*		5
36	鍛治　弘																																				*	*	*	*		4
37	石川三千雄																																					*	*	*		3
38	佐々木繁																																					*	*	*		3
39	中島敏夫																																						*	*		2
40	江木　博																																						*	*		2
41	泉　和男																																							*		1
42	木綿弘子																																							*		1
43	染川利吉																																							*		1
44	松田忠好																																							*		1
45	岸　葉子																																							*		1
46	谷　岑夫																																									0
47	佐藤義男																																									0

あとがき

総務幹事　杉山　直

節目の40回展に記念誌を発行しようと言う話が出たのは39回展の席であった。それから1年、新しく会に参加してくれる会員を大歓迎しながら、今まで一緒に絵を描いてきた仲間が天寿を全うして天国に召されたり、病気などの理由で会を離れていくことが限りなく悲しく残念であった。黒百合会も激動の時代なのかもしれない。

今回、会員のショートエッセイを掲載したが、会員各位の会に対する思い入れや絵に対する熱意が伝わってくる。

会員自身が切磋琢磨するのは当然のことであるが、同時に外に目を向け会員の獲得にも力を入れていきたいものだ。

会の行事は10月の黒百合会展に集約されるが、スケッチ会、デッサン会やグループ展などにも積極的に参加して会活動を活発化していきたいものだ。それぞれの運営責任者に期待するところ大である。

さて、東京黒百合会の最近のトピックスはホームページの立ち上げだろう。世の中ではホームページ上で企業イメージを訴求したり、個人でも自己PRにホームページを活用する例は多いが、絵画活動を主とする当会が映像を主体に存在感を世に問うことができる時代になったこと、会員の交流もホームページ上の企画展などでより深まることは将来に向けて期待が膨らむ。

一口に40年と言っても、人間に例えれば働き盛りの壮年期なのだろう。今こそあらゆるものに貪欲に挑戦し習得し来るべき将来に備える時期と言える。

本誌を通じて、過去を振返り、現在を認識し、将来への大いなる希望を持っていただければ幸いである。

東京黒百合会　第４０回展記念誌

2002 年 10 月 6 日　発行

編集委員　江澤昌江、小石浩治、後藤一雄、
　　　　　杉山　直、細井真澄
発行　　　東京黒百合会
　　　　　(http://members.jcom.home.ne.jp/tkuroyuri/)
　　　　　発行責任者　小石浩治

　　　　　(kjkoishi@c3-net.ne.jp)
印刷　　　大同印刷株式会社
　　　　　Tel.03(3643)0211　FAX.03(3643)0756